

東アジア・北アジア仏教研究の展望	1
2023(令和5)年度「特定・指定研究」資料室「研究組織」一覧	2
2023(令和5)年度「指定研究」等研究目的紹介	4
2023(令和5)年度「一般研究」等研究組織一覧	12
2023(令和5)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	16
2023(令和5)年度東京分室PD研究員個人研究 研究目的紹介	19
公開講演会・研究会開催報告	20
獣医抄ワークショップ参加	24
海外研究調査報告	26
国内研究調査報告	28
彙報	30

研究所報

東アジア・北アジア仏教研究の展望

東アジア・北アジア仏教研究 研究代表者・教授 松川 節

真宗総合研究所における東アジア仏教研究は、東本願寺中国布教史の研究から始まり、1992年度から指定研究「国際仏教研究」班にアジア仏教研究が追加され、紆余曲折を経た後、2005年度から国際仏教研究班内に「中国班」が設置され、「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の研究が発足した。当初の研究目標は①大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料の目録作成、②中国東北師範大学との共同研究であった。2010年には中国社会科学院歴史研究所（現：古代史研究所）と学術交流協定を締結し、上記研究テーマに沿いつつ研究者の往来と現地調査を継続してきた。

一方、北アジア仏教研究すなわちモンゴル仏教の研究は、指定研究「西藏文献研究」内で開始され、2013年にモンゴル国立大学社会学部（現：科学部）と学術交流協定を締結してから加速し、「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13世紀～17世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的的研究」をテーマに研究者の往来と現地調査を継続し、1期3年で三期継続した。

代表者が今まで行ってきた研究の目的は、東アジア・北アジアの広範な地に伝播・流布した仏教の諸相を「モンゴル」との関わりにおいて究明していくことである。17世紀以降のモンゴル仏教にはチベット仏教からの強い影響が見られるが、13・14世紀のモンゴル帝国・元朝期のモンゴル仏教には契丹仏教、ウイグル仏教、華北仏教、西夏仏教の影響がそれぞれ見られ、それ以前のモンゴル高原にはウイグル帝国時代のソグド仏教、柔然時代の中央アジア系仏教の影響も見られ、最近モンゴル国で寺院址の考古学的発掘調査が盛んに行われるようになった結果、モンゴルに仏教が重層的に伝播した状況が次々と明らかになっている。

実際、モンゴル国における仏教研究において考古学分野（いわゆる「仏教考古学」）の発展は目覚ましく、特に遺跡出土標本に対して放射性炭素年代測定を適用することにより、今まで史料の制約から曖昧模糊としていた15～17世紀の北アジアにおけるモンゴル仏教、

すなわちモンゴルにチベット仏教のゲルク派が伝播する前の状況が、次第に輪郭を結び始めた。2023年11月6・7日にはモンゴル国ウランバートル市のガンダン寺において第2回「仏教と考古学」国際会議が開催され、6カ国より32件の研究発表があり、大谷大学も後援機関として名を連ねた。

このように仏教研究が盛んになる中で、2023年度より指定研究として「東アジア・北アジア仏教研究班」が立ち上がった意義は極めて大きい。本研究班の使命は、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を発信していくために、東アジア・北アジアにおいて本学が学術協定を締結している諸機関との共同研究ネットワークを強化し、本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進する点にある。そのための具体的な研究課題として、東アジア・北アジア仏教史全般に関わる「釈迦如来梅檀瑞像」の伝播をテーマに日本・中国・モンゴル国・ブリヤート共和国の研究者が共同研究を行い、2025年度に本学で国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける「釈迦如来梅檀瑞像」伝播の諸相の解明と東アジア・北アジア学術研究ネットワーク構築」を開催して成果を公開する計画を立てている。

インド起源とされる釈迦如来梅檀瑞像は、中国各地で移転と安坐を繰り返した。10世紀後半に入宋した東大寺の僧・奄然が開封でこの瑞像を模刻し、日本に将来したものが京都嵯峨の清涼寺に安置されており、我々にも馴染み深い像である。瑞像は清朝初期到北京の梅檀寺に移されたが、1900年の義和団事件の際に焼失し、行方不明になったとされていた。しかし、このとき瑞像は密かに運び出され、モンゴルを経由してブリヤートに将来され、バイカル湖東方のエギトウイ寺に安置されたというのである。果たしてこの瑞像は清涼寺の模刻像と一致するだろうか。また、瑞像が経由したとされるモンゴルに記録が残っているだろうか。これらを検証するために、仏教を基軸とした国際共同研究を推進していく所存である。

2023(令和5)年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧

【特定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
「大谷大学樹立の精神」100年	研究課題	佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる
	研究代表者	一 楽 真
	研究員	西 本 祐 攝 (准教授・真宗学) 大 艸 啓 (講師・日本古代学) 戸 次 顕 彰 (講師・仏教学)
	研究補助員(RA)	英 貴 志 (博士後期課程第1学年) (～2023年9月30日)

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	欧米諸国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	井 上 尚 実
	研究員	井 上 尚 実 (教授・真宗学) Michael J. Conway (准教授・真宗学) 木 越 康 (教授・真宗学) Dash Shobha Rani (教授・仏教学) Ama Michihiro (准教授・国際学) 新 田 智 通 (准教授・仏教学(インド))
	嘱託研究員	James C. Dobbins (オバークリン大学名誉教授) Mark L. Blum (カリフォルニア大学バークレー校教授) Wayne S. Yokoyama (元花園大学講師)
	研究補助員(RA)	羽 田 信 生 (毎田周一センター所長) Woo Jongin (博士後期課程第3学年) 但 馬 普 (博士後期課程第1学年) (2023年6月1日～)
東アジア・北アジア仏教研究	研究課題	仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築
	研究代表者	松 川 節
	研究員	松 川 節 (教授・人文情報学・東洋史学) 松 浦 典 弘 (教授・東洋史学) 箕 浦 暁 雄 (教授・仏教学) 井 黒 忍 (准教授・東洋史学)
	嘱託研究員	三 鬼 丈 知 (本学非常勤講師) (～2023年9月30日) P. Delgerjargal (モンゴル国立大学教授) 春 花 (中国故宫博物院図書館研究員)

清沢満之研究	研究課題 研究代表者 研究員 嘱託研究員 研究補助員(RA)	清沢満之の生涯と思想の研究－西方寺所蔵文献の研究－ 西本 祐 攝 西本 祐 攝 (准教授・真宗学) 西尾 浩 二 (准教授・西洋哲学) 福島 栄 寿 (本学教授・近代日本仏教史・近代日本思想史) 名畑 直日児 (真宗大谷派教学研究員) 藤井 了 興 (本学任期制助教) 山 雄 優 生 (博士後期課程第3学年)
大学史研究	研究課題 研究代表者 研究員	大学史関係資料の収集・整理 藤元 雅 文 藤元 雅 文 (研究所主事・准教授・真宗学)
仏教写本研究	研究課題 研究代表者 研究員 嘱託研究員	パリー語貝葉写本の研究－保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心に－ Dash Shobha Rani Dash Shobha Rani (教授・インド学・仏教学・貝葉写本研究・インドの古典芸能) 江 森 英 世 (教授・数学的コミュニケーション論／創発／理解認知) 新 田 智 通 (准教授・仏教学 (インド)) 戸 次 顕 彰 (講師・仏教学) Suchada Srisetthaworakul (マヒドン大学講師・古典写本研究センター・センター長〈タイ・アユタヤ〉)
チベット文献研究	研究課題 研究代表者 研究員 嘱託研究員 研究補助員(RA)	大谷大学所蔵チベット語文献の研究 三宅 伸一郎 三宅 伸一郎 (教授・チベット学) 上野 牧 生 (准教授・仏教学) 伴 真一郎 (2022年度西藏文献研究嘱託研究員) 三輪 悟 士 (博士後期課程第3学年)
宗教・社会研究	研究課題 研究代表者 研究員 PD研究員	宗教と社会の関係をめぐる総合的研究－現代社会における宗教と共生－ 福島 栄 寿 福島 栄 寿 (東京分室長・教授・近代日本仏教史・近代日本思想史) 陳 宣 聿 (PD研究員・宗教学) 磯 部 美 紀 (PD研究員・社会学) 澤 崎 瑞 央 (PD研究員・仏教学) 鶴 留 正 智 (PD研究員・真宗学)

【資料室】

名 称	研究課題及び研究組織	
デジタル・アーカイブ資料室	研究課題 室 長 嘱託研究員	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築 藤元 雅 文 (研究所主事・准教授・真宗学) 川 端 泰 幸 (博物館主事・准教授・日本中世史)

※変更が生じた場合、大学ホームページにて、随時、更新いたします

2023（令和5）年度「指定研究」等研究目的紹介

特定研究「大谷大学樹立の精神」100年

佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる

研究代表者・教授 一楽 真
(真宗学)

大谷大学は1922（大正11）年に大学令による大学として認可された。大学令が出されたのが1918年であるから、いち早く認可を受けた大学の一つである。そして、校名も「真宗大谷大学」から「大谷大学」へと改めた。その大谷大学が誕生した2年後の1924年に第3代学長に就任した佐々木月樵は、翌1925年の入学宣誓式において、「大谷大学樹立の精神」という講演を行い、大学令に基づく大谷大学としての使命を述べる。この言葉は初代学長清沢満之の「真宗大学開校の辞」と併せて、本学の建学の精神として位置づけられている。

2025年には「大谷大学樹立の精神」が発表されてからちょうど100周年となる。100年を迎えるにあたり、「大谷大学樹立の精神」に込められた佐々木月樵の願いをあらためて確かめていくことが本研究班の大きな目的である。

この目的を達成するためには、まず佐々木の生涯や著述活動の全体像を把握することが必須となる。佐々木月樵の著作に関しては、すでに『佐々木月樵全集』（全6巻）にまとめられているが、そこに収載されているものは著作などのごく一部であり、論文やエッセイ等の収載されていないものが多く残されている。

本研究班では、『佐々木月樵全集』に収められていない著作について、それらを収集してデータ化し、その一つひとつについて校正・読解・検討する作業から始める。幸いなことには、すでに2006年度「大学史研究班」によって佐々木に関する文献はかなり収集されており、そのリストも残されている（そのリストによれば、592点の論文・エッセイなどが確認できる）。本研究班においては、まず「大学史研究班」によって作成されたリストをあらためて精査・整理し、収集されていない文献についてはそれらを収集し、すでに収集されている文献についてはデータ化して校正していく作業をおこなう。そのうえで、データ化し校正が完了したものを順次何らかの手段によって共有していくことも検討していきたい。

こうした作業を経て、佐々木の生涯にわたる著作活

動およびその内容の全体像の把握を目指す。そのうえで、特に「樹立の精神」に関係する文献や、欧米視察に関係する文献については、特に注意深く検討を進めていきたい。「樹立の精神」に関係する文献は、それらに注目することによって「樹立の精神」が発表された背景を明らかにすることにつながると考えられる。

また、「樹立の精神」には欧米の大学の様子も記されている。佐々木は1921年に、以前より親交のあった沢柳政太郎を団長とする文部省の欧米視察団の一員として同行し、約一ヶ月間、欧米の宗教・教育事情を視察した。「樹立の精神」には、佐々木が実際にヨーロッパおよびアメリカの教育事情を視察したことに基づく知見が大きく反映されており、こうした背景があって「樹立の精神」は出てきている。この点に注目することは、本学の建学の精神を確かめる作業にとどまらず、日本の教育史あるいは大学史における大谷大学の位置を確認することにも関係していくと考えられるのである。

最終的には、佐々木月樵の小伝、および「樹立の精神」を学生や教職員が学ぶための副読本の作成を目指したいが、本研究期間内では、そうした刊行物作成の基盤を整備することが主な目的となる。2年間の研究期間終了後も、教員や大学院生が中心となり、佐々木月樵研究を継続していける体制を整えていくことが研究期間内における本研究班の使命であると考えている。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

仏教学・宗教学の分野における国際化は COVID-19 による大きな影響を受けた後もインターネットを活用しながら一層進んでおり、真宗学についても英語などの国際語による研究を視野に置いて研究成果を公開していかなければならない状況にある。そうした動向に対応すべく、海外の学術交流協定校などの研究機関および真宗大谷派北米開教区 Shinshu Center of America と協力して研究活動を進めていく。

本年度は具体的に以下のようなテーマで研究活動を行う。

活動内容

①国際学会・ワークショップへの研究員の派遣

『歎異抄』翻訳研究ワークショップ (2023 年6月に京都の龍谷大学、2024 年3月に米国カリフォルニア州パークレーで開催予定) に研究員と公募で選ばれた大学院生を派遣する。この国際ワークショップは、カリフォルニア大学パークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと本研究所の学術交流協定に基づいて継続的に開催されている。

②国際シンポジウムの開催

12月15日(金)から17日(日)の3日間、本学を会場に国際シンポジウム “Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World’s Religious Traditions” (世界の宗教的伝統におけるさとりと知恵と変容) を開催する。これは2021年に本学の開学120周年記念シンポジウムとして計画され、新型コロナウイルスの感染拡大により延期されてきたものであり、ハンガリーの学術交流協定校 ELTE の代表を含む国際的な仏教・イスラム教・キリスト教研究者を招待して開催する。大谷大学関係の発表者と題目は以下の通り (発表順)。

1) 箕浦暁雄 (仏教学科教授)

Remaining in Suffering and Walking Ahead: The Shift in the Meaning of Life in Buddhism

2) Michael Conway (「国際仏教研究」研究員)

Shinran’s Understanding of the Pure Land as

“The Land of Immeasurable Light”

3) 新田智通 (「国際仏教研究」研究員)

The Emergence of the “Human Buddha” in the Nineteenth Century Europe and the Prejudice of the Enlightenment: Focusing on the Ozeray and Burnouf

4) Ama Michihiro (「国際仏教研究」研究員)

Unbreaking the Broken Commandment: A Buddhist Reading of Hakai

5) 井上尚実 (「国際仏教研究」研究員)

The Enlightenment and Transformation of King Ajātaśatru according to the Mahāyāna *Mahāparinirvāṇa sūtra*

6) Sepideh Afrashteh (大谷大学客員研究員、イランから来日中)

“Illumination Wisdom” for Achieving Enlightenment in the Book of Red Wisdom by Suhrawardi

以上6名の発表者の他に、木越康 (真宗学科教授「国際仏教研究」研究員)、藤枝真 (哲学科教授)、Robert Rhodes (名誉教授) がセッションの司会・応答者として参加。

③国際シンポジウムの成果出版

ELTE 東アジア研究所との共催で2018年にブタペストで開催された第3回国際仏教シンポジウム *Buddhism in Practice* の成果を出版する (ELTE 東アジア研究所より発行)。第1回から ELTE 側と本研究所と交互に編集発行を担当してきており、第3回分は先方の担当で2023年度中に発行される予定であり、その作業に協力する。

④「女性と仏教」に関する国際的研究の継続

「女性と仏教」をテーマとする国際的な研究者との関係を開拓し、2019年度のワークショップに続くさらなるワークショップの開催に向けて準備を整える。「女性と仏教」をテーマとする研究データベースを作成し、インターネットでの公開を目指す。

⑤Shinshu Center of America の英訳事業への協力

真宗大谷派北米開教区の Shinshu Center of America から出版される浄土真宗、特に大谷派関係の書籍の英文翻訳への協力 (専門用語の英文訳語の検討など)。

東アジア・北アジア仏教研究

仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築

研究代表者・教授 松川 節
(人文情報学・東洋史学)

本研究の意義と目的

国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を発信していくために、アジアにおける仏教研究の動向を把握するとともに、東アジア・北アジアにおいて本学が学術協定を締結している諸機関との共同研究ネットワークを強化し、本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進することを目的とする。

目標と期待される成果

①東アジア・北アジアにおける仏教研究の動向把握

本学が学術協定を締結してきた実績を有する中国社会科学院古代史研究所、モンゴル国立大学を中心に、学術交流を通して最新の仏教研究動向の調査研究を行う。具体的には、I) 新型コロナ禍によって中断していた中国社会科学院古代史研究所との学術交流を復活させ、「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究」をテーマに双方の研究者が往来し共同研究を実施する。II) モンゴル国立大学との共同研究「モンゴル仏教の起源に関する仏教学・歴史学・考古学的研究」を、双方の研究者が往来して共同で実施する。III) 共同研究ネットワークを強化するために、中国（北京）故宫博物院図書館所蔵文献と本学図書館所蔵文献との比較共同研究、モンゴル国ガンダン寺学術文化研究所との共同研究「ガンダン寺所蔵文献と本学図書館所蔵文献の比較研究」を行う。

②本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進するために、東アジア・北アジア仏教史全般に関わる「釈迦如来梅檀瑞像」の伝播をテーマとして日本・中国・モンゴル国・ブリヤート共和国の研究者が共同研究を行い、2025年度に本学で国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける「釈迦如来梅檀瑞像」伝播の諸相の解明と東アジア・北アジア学術研究ネットワーク構築」を開催して成果を公開する。

③研究体制変更に伴い、前研究体制での研究項目I)「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウム（2015年12月開催）の成果論文集の出版、II)『日本仏教概説（ベトナム語版）』の出版、以上2点を実施する。

研究計画

2023年度

①「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウム（2015年12月開催）の成果論文集の出版、『日本仏教概説（ベトナム語版）』の出版を2023年度的最優先事項として行う。

②新型コロナ禍の収束状況に鑑みつつ、中国社会科学院古代史研究所と本学との研究者往来による共同研究の実施を行う。故宫博物院図書館と共同研究を実施する（本学所蔵仏教文献と故宫博物院図書館所蔵仏教文献との文献学的比較研究）。故宫博物院図書館の春花研究員は、本学に客員研究員として滞在する期間（2023年6月～12月）を中心に、嘱託研究員として共同研究を実施する。

③モンゴル国立大学と本学との研究者往来による共同研究・現地調査を行う。（P. デルゲルジャルガル嘱託研究員を招聘、11月、7泊8日、1回；松川節・井黒忍研究員はモンゴル国にて現地調査、9月、7泊8日、1回）。松川・井黒の現地調査においてはガンダン寺所蔵仏教文献調査をも行う。

2024年度

①中国社会科学院古代史研究所と本学との研究者往来による共同研究の実施を継続する。

②モンゴル国立大学と本学との研究者往来による共同研究・現地調査を行う。

③ブリヤート共和国のロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究センターを訪問し、「釈迦如来梅檀瑞像」についての共同研究を行う。

2025年度

①中国社会科学院古代史研究所、モンゴル国立大学との共同研究を継続する。

②国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける「釈迦如来梅檀瑞像」伝播の諸相の解明と東アジア・北アジア学術研究ネットワーク構築」を本学で開催し、「仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワーク構築」の3年間の成果を公表して評価を問う。

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究
— 西方寺所蔵文献の研究 —研究代表者・准教授 西本 祐攝
(真宗学)

本研究は1991年度に発足し、1993年度に、当時、研究代表を務めていた安富信哉によって本学編『清沢満之全集』の刊行が提言されて以降、清沢満之の生涯と思想の研究、及びそれに関する文献の調査収集を行ってきた。その成果として『清沢満之全集』（全九巻、岩波書店、2002～3年、以下『全集』と略）を刊行した。さらに『全集』に収録されていない新たな文献群を『清沢満之全集』別巻Ⅰ・Ⅱ（岩波書店）として2019年度と2020年度に刊行した。

『全集』刊行に際しては、従来の無我山房『清沢全集』（全三巻）、有光社『清沢満之全集』（全六巻）、法藏館『清沢満之全集』（全八巻）には掲載されていない99文献を、『全集』別巻刊行に際しては、34文献を新たに収録するに至った。『全集』および『全集』別巻には清沢満之自坊の西方寺に所蔵されている日記、思索録、書簡、刊行物掲載論文等を依拠本として多くの文献を収録した。これは、1998年度から、西方寺の全面的な協力をいただき、当時の研究員と研究補助員、補助者が蔵書整理、文献調査、調査カードの作成、文献目録作成等を行い、写真撮影、内容精査等を地道に行ってきたことによる。

本研究では、西方寺所蔵清沢満之自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）の影印（36枚撮りフィルム248本分、総コマ数8500枚超）を所蔵しているが、『全集』及び、『全集』別巻、その他で公開済の文献はその3分の1程である。これは主に『全集』が清沢満之自身の著述を収録し清沢満之の受講ノートや書籍からの抜書、メモ、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。未公開文献には、清沢満之の育英教校、帝国大学、真宗大学寮の頃から後年に至るまでの文献が含まれ、帝国大学時代については「真宗学」「仏教学」「歴史学」「哲学」「生物学」「儒学」「数学・化学」「心理学」等の受講ノートを確認できる。これらは「清沢満之の思想形成を探る資料としての価値」、関係教育機関で「どのような教育がなされたのか」という近代日本教育史の資料」ともなるものである。本研究では、『全集』に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っており、2016年度終了時には全文献の翻刻を済ませ、一次校正に進んでいる。2018年度～2020年度は『全集』別巻の刊

行に専注したため、西方寺所蔵文献の校正を中断した。これらの未公開文献について研究を進めることは、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものである。執筆時期も分野も内容も多岐に及び、すべてを公開することは一朝一夕に実現可能なことではないが、貴重な清沢満之自筆文献の影印を預かる本研究が継続的になすべき研究であり、その内容精査とともに公開に向けた研究活動を継続している。昨年度からは、具体的に、次の2点を柱として研究活動を行っている。

1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究

2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして36枚撮りフィルム167本分、総文字数3,703,420字である。その中には、清沢満之の生涯全般にわたる文献を確認することができるが、その全体については、未だ十分な精査ができていないと言いがたい。その全てについて、分野、内容、執筆年代等の確認・整理・検討を行う必要があり、まずはその全貌について精査する研究を進め、全文献の年代、分野等を確定する文献リストの作成を開始し、3カ年での完成を目指す。これらの研究であきらかにした成果については、これまで同様に西方寺と情報共有を行っていく。また、清沢満之の著述について、未収集文献を調査・収集する活動も継続していく。

前年度は計画通り、西方寺所蔵文献所蔵リストの作成を継続し、2021年度からの2年の活動期間で未公開分フィルム167本全ての基礎的な確認作業を行った。また、①リスト作成に向けた文献確認とともに、各文献の執筆年次、種類、内容を踏まえた解題（書誌情報）を作成し、執筆年次が判明したものについては、清沢満之の年譜にプロットしていく作業を並行して行っている。さらに、②本研究が西方寺所蔵文献を調査して以来、作成してきた現状のデータでは、本研究が所蔵する各写真のいずれが『全集』収録・未収録かについて整理されていないため、これらを判別することができるデータの整理も並行して行った。2022年度中には、①②の作業の全フィルムについて確認を終えることができた。

これらは、基礎的な作業であり、2023年度は、すべての文献について基礎作業を終えた後に、再度、それを踏まえた各文献についての個別の調査を行いつつ、『全集』未収録の全文献を確認し、リストの完成を目指す。年時を確定することが困難と考えられるメモ、文字の練習等の記述もあるが、できるだけ、それらを確定する作業を重ねていく。

チベット文献研究

大谷大学所蔵チベット語文献の研究

研究代表者・教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

大谷大学は北京版チベット大藏経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を、専門の研究者が十分に活用できるような形で研究し、重要・貴重と思われるものについては公開することを目的としている。また、海外の研究機関との交流を通し、それら研究機関に所蔵されている貴重なチベット語の各写本・經典類や学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。

上記目的を達成するために、以下のチベット語文献の研究と公開を行う。

(1) 蔵外 no.12767: 『聖大集目連菩薩救母経 (Phags pa 'dus pa chen po byang chub sems dpa' mo'u 'gal gyi bus ma la phan btags pa'i mdo)』(写本・127葉)の研究

本経は、目連が地獄に堕ちた母を救う、いわゆる「目連救母説話」を内容とするものである。「経」と題され、翻訳者の名前も奥書に記載されていることから、サンスクリット語からの翻訳仏典を主張しているが、様々な点から考えて、明らかに「擬経」と考えられる。「目連救母説話」は、中国で成立したものであり、その意味で本経は、中国仏教とチベット仏教の交流を考える上で重要な資料である。同内容のテキストの所蔵は、国外の研究機関にごくわずかに見られ、しかも、公開はされていない。この貴重な文献の公開を目指し、2023年度は、テキスト全体の入力を行う。

(2) 蔵外 no.11841 『ブトン仏教史』の翻訳研究

本文献は、14世紀チベットを代表する学者ブトン・リンチェンドゥブにより著されたもので、インド・チベット仏教史およびチベット大藏経成立史を研究する上での基本資料として詳細な研究がなされてきた。しかし、その第1章仏教概説の部分は、14世紀チベットにおける仏教理解の一端を解明する上で必要不可欠な資料であるにもかかわらず、未だ詳細な研究はなされていない。その理由は、研究のための基本的な作

業、すなわち校訂テキストや引用箇所の手定などがなされていなかったためである。この現状に鑑み、2022年に本研究班が公開した校訂テキストに基づいて和訳研究を行う。2023年度は、『研究所紀要』にその成果を発表する。

(3) 『モンゴル仏教史』の翻訳研究

2019年に本研究班が刊行したイエシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』(寺本婉雅旧蔵)を、そのモンゴル語版と対照し詳細な和訳研究を行う。2023年度は、その成果を『研究所紀要』で発表する。

仏教写本研究

パリー語貝葉写本の研究—保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心に—

研究代表者・教授 Dash Shobha Rani
(仏教学)

大谷大学には、パリー語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その一部はある程度整理され、研究されているが、未整理で研究されていないものも多く残っている。

本研究は、主に三つの柱を立てて研究を行う。一つは、1985年に本学図書館によって出版された『大谷大学図書館所蔵 貝葉写本目録』（以下、『貝葉写本目録』）に登録されているパリー語貝葉写本を取り上げ、その保存、整理と利便性、そして学術研究の準備を整えることを主な目標とする。そのため、貝葉写本の高度なデジタル化、上記の『貝葉写本目録』のデータベース構築、写本が包まれていたと思われる包み布の研究、関連資料の収集、ローマ字転写テキストや校訂本の作成、翻訳などを中心に作業を行なう。そのために必要な資料を収集する。

二つ目は、写本とは単なる文字の集合体ではなく、それが作成された、または書写された地域・文化の様々な様相も含まれているため、写本の「総合的な研究」が求められる。そのため、本研究は、文献研究にとどまらず、写本研究に基づき、南アジア・東南アジアを中心にその文字、言語、文化、信仰などの国際的・学際的な研究を行うことを目的とする。加えて、仏教写本の特徴や性格をより明白に示すために、その他の対象写本と比較検討する。

三つ目は、写本研究を最新の情報に基づき行うため、関連資料収集、共同研究の実施および研究者・研究機関とのネットワーク構築を目指す。研究者のネットワークを築くとともに本研究の視野を広げる目的で、海外の研究機関との学術交流を図り、それら研究機関の所蔵資料をも活用し、人材の協力を得る。写本や関連文献の研究を踏まえ、諸国における仏教文化や仏教の現状について研究することが可能になり、多角的な視点から仏教の受容性や現代におけるその意義を明らかにする。学術交流の一環として、交流先の研究者と本班（必要に応じて、他の研究班も含む）の人材を生かして、共同研究・国際シンポジウムなどを開催し、その成果を出版物として公刊する。

研究活動及び成果の国際的な評価を目的として、海外の研究機関における研究活動紹介、成果発表会を定期的に行い、英語での出版を目指す。そして、本研究

は写本中心ではあるが、仏教思想、仏教文化という拡大した領域に渡って研究を行うため、研究者のみならず、社会に還元する目的で、成果の一部について一般の社会人を対象に公開発表会も定期的に行う予定である。

この目的を達成するために、2022年度から継続して2023年度において以下の研究活動を予定している。

(1) **高度なデジタル化**：貝葉写本の多角的な研究に役立つよう、本学所蔵貝葉写本の高度なデジタル化の補助およびデジタル化された資料の保存と整理を行う。

(2) **包み布の研究調査**：タイから贈られてきた貝葉写本が包まれていたと思われる包み布は現在63枚ある。コロナ禍の影響により中止になっていた本学所蔵貝葉写本の包み布の研究調査を再開する予定である。

(3) **『貝葉写本目録』のデジタル化**：写本のデジタル化にとどまらずに、これらの貝葉写本の詳細を便利に使えるよう『貝葉写本目録』もデジタル化する。そのため、データ入力・校閲作業を継続して行う。そして、これらの収録された貝葉写本の情報を国際的に発信するために、その英語版を作成する。

さらに、本目録の中にビルマ文字の写本として収録されている貝葉写本については、使用文字の種類に関する指摘があったため、今後それを検討していく。

(4) **ハイデルベルク大学との共同研究**：写本研究の総合的で新たな研究及び技術・知見の集積を目的として、ドイツのハイデルベルク大学の Department of Cultural and Religious History of South Asia と「Manuscriptology and Digital Humanities」(写本研究とデジタル人文学) という共同研究会のもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的開催する。詳細については以下の URL を参考にしていきたい。

<https://www.sai.uni-heidelberg.de/krs/forschung/manuscriptology-and-digital-humanities.html>

(5) **ネットワーク構築**：現在も宗教文化の一部として多くの写本を所蔵するタイとインドでの協力機関、研究協力者とのアカデミックネットワークを構築する。本学との学術協定が成立している教育研究機関の協力を得て、本研究班の研究目的の達成のため学術交流・共同研究を図る。2023年度はタイのDTP 仏教写本研究との協定の締結を目指す。

(6) **ローマ字転写テキストの作成**：『貝葉写本目録』の写本のローマ字転写テキストを順次作成し、バリエーションを示す。

(7) **資料収集**：国内外の研究機関・所蔵機関より関連資料及び情報を収集する。

大学史研究

大学史関係資料の収集・整理

研究所主事・准教授 藤元 雅文
(真宗学)

本研究班の意義・目的は、大谷大学史資料室が取り組んできた内容を継承しつつ、大谷大学史の研究全般に寄与することである。大谷大学の歴史を研究することは、本学がどのような大学であるかを確かめるために必要不可欠な事柄である。そのために大学史に関連する資料を収集・整理することは、大学史研究のための基礎作業であり、本研究が第一に取り組んでいく内容も、大谷大学の公文書及び、大谷大学の歴史を知る上で必要な資料の収集・整理・保存である。

また、大谷大学史資料室において従来から、収集・整理した資料を大谷大学内外に公開することに取り組んでおり、2023年度も継続していく。さらに大学史資料の多くが電子データとなっている現況をふまえ、中期的な視野にたつて、大学史資料の取捨・整理・保管および大学史研究の体制作りについても検討していく。そのため、特に大谷大学史資料に専門的な知見を有する研究者に聞き取りなどを行い、大学史研究における課題を明確にして、それらの課題に取り組む方向性を明らかにする。最後に、現在特定研究として取り組まれている「大谷大学樹立の精神」100年の研究班とも、必要に応じて連携し、大谷大学の歴史および建学の精神の公開に寄与していきたい。

上記の目的にもとづき、2023年度における具体的な目標として、以下の内容を掲げ、取り組んでいく。

- (1) 未整理の大学史資料の整理、保存
- (2) 全国大学史資料協議会への参加をはじめ、他大学の大学史編纂室や公文書館など大学史に関係する組織と交流を図り、情報交換する。
- (3) 整理した大学史資料を図書館などで公開する。
- (4) 大学史に関わる資料の保管体制の検討
- (5) 特定研究班「大谷大学樹立の精神」100年との共同作業を通して、第三代学長佐々木月樵関連の資料の整理、収集、分析、公開にとりくむ。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブの構築

室長・准教授 藤元 雅文
(真宗学)

本資料室の目的は、大谷大学図書館所蔵古典籍等の貴重な学術資産のデジタル化を行うことによって、資料の保存と公開、そして学術研究への利便性を図ることである。

2023年度においては、大谷大学図書館所蔵古典籍に関して約1150冊の古典籍のデータベース構築を目標とする。従来、これらの古典籍のカタログは紙媒体のもののみが存在していたが、多くの研究者たちにこれらの古典籍の存在を伝え、研究に役立つようデータベースを構築している。本作業は2015年より継続中であり、現時点(2023年12月)では18903冊の古典籍のデータベースが公開済みである。

上記の目的および目標に基づく研究活動を概括すると、下記のとおりとなる。

- ①大谷大学図書館古典籍のデータベース構築
- ②デジタル化された資料の保存と整理
- ③その他の大学所蔵各種データのデジタル化と整理・保存、及び公開に向けての検討
- ④本学が取り組むべき各種データのデジタル化と整理・保存、及び公開に向けての検討

2023年度においては、上記のとおり研究活動を推進する。

宗教・社会研究

宗教と社会の関係をめぐる 総合的研究 —現代社会における宗教と共生—

研究代表者・教授 福島 栄寿
(近代日本仏教史／近代日本思想史)

研究の目的：人類が経験した新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、いまだに現代日本社会の私たちの心や身体、生活スタイルにも、影響を与えている。あまつさえ多様な価値観を内包する現代社会において、様々な変化を強いられているなか、宗教のあり方もまた問われている。当然ながら、現代社会において、宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も強まっている。そこで本研究は、宗教と社会との多種多様な関わり合いが見られる現代の東京・首都圏という場において、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことを目的とする。

研究の目標：人類にとって根本的な問いであり続ける、「どう生きるのか?」「どう死ぬのか?」という問題を主軸とし、宗教というフィルターを通して、社会に存在する、もしくは存在した様々な価値観の構造を明らかにすることを目指す。具体的なテーマとしては、生命倫理、道徳、性差、人権、秩序、死生観、メディア、政教分離、優生思想、多文化共生などを取り上げ、宗教との関係性を考察する。各年度に上記テーマに関連した研究会を開催することで当該問題に関する理解を深めるとともに、シンポジウムを開催して広く研究成果を大学の内外に向けて発信する。本年度も、昨年度に引き続き、サブテーマ「現代社会における宗教と共生」を設定し、「共生」を鍵概念に、私たちと宗教の多様な関係のあり方について考察し、宗教の役割を解明していく。

2023年度の研究計画：2023年度においても、前年度に引き続き「現代社会における宗教と共生」というサブテーマを設定し、特に「共生」という鍵概念を手がかりに、私たちと宗教の多様な関係を考察し、現代社会における宗教の役割を解明していく。各研究員の研究計画は以下の通りである。

磯部研究員は、現代日本の葬儀における僧侶の役割について、僧侶・葬祭業者などの語りをもとに検討し、葬儀に宗教的要素が取り込まれることによって、生者と死者の「共生」はどのように図られているのか

を考察する。

澤崎研究員は、大乘仏教において示された新たな人間像としての「菩薩」に着目し、仏教文献に示される仏教徒の生き方の具体的内容を解明することを通して、現代社会における人生観・死生観および「共生」のありようを模索する。

鶴留研究員は、『歎異抄』の解読を通じて宗教的理念を考察する。『歎異抄』に示される宗教的理念は、個人的なものであると同時に、共同体における共通の理念として示されるものである。これを学問的に確かめることによって、浄土真宗の思想が現代社会の諸問題における「共生」の理念に対してどのようにアプローチするかを考察する。

福島研究員は、昨年度に引き続き、研究全体のとりまとめを行うとともに、現代社会における宗教の役割について「共生」を鍵概念に考察する。前年度に引き続き、特に現代沖縄における宗教事情について、浄土真宗を始めとする仏教各宗・キリスト教等の諸宗教と伝統宗教との「共生」のあり方に着目して考察する。

2023（令和5）年度「一般研究」等研究組織一覽

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（江森英世班） 【2020～2024年度「科研費」採択】	研究課題	健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知－非認知能力の測定
	研究代表者	江 森 英 世
	研究員	江 森 英 世（教授・数学教育学）
	協同研究員	竹 村 景 生（天理大学教授）
一般研究（木越康班） 【2021～2023年度「科研費」採択】	研究課題	人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究
	研究代表者	木 越 康
	研究員	木 越 康（教授・真宗学） 東 館 紹 見（教授・日本仏教史学） 藤 枝 真（教授・宗教学・哲学） 徳 田 剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学） 藤 元 雅 文（准教授・真宗学） 野 村 実（講師・モビリティ／まちづくり／地域交通政策／コミュニティ）
	協同研究員	斉 藤 仙 邦（東北福祉大学教授） 萩 野 寛 雄（東北福祉大学教授） 阿 部 友 香（佐久大学人間福祉学部講師） 本 林 靖 久（本学非常勤講師・特別研究員） 磯 部 美 紀（東京分室 PD 研究員・社会学）
一般研究（佐藤愛弓班） 【2022～2026年度「科研費」採択】	研究課題	勸修寺資料からみた文庫の形成・維持に関する総合的研究－新たな寺院文化論として－
	研究代表者	佐 藤 愛 弓
	研究員	佐 藤 愛 弓（教授・国文学）
	協同研究員	上 島 享（京都大学大学院教授） 藤 原 重 雄（東京大学史料編纂所准教授） 三 好 俊 徳（佛教大学准教授）
一般研究（福島栄寿班） 【2022～2024年度「科研費」採択】	研究課題	九州沖縄仏教史・真宗史に関する基礎的研究－新出資料・布教ネットワーク・潜伏宗教－
	研究代表者	福 島 栄 寿
	研究員	福 島 栄 寿（教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
	協同研究員	知 名 定 寛（神戸女子大学名誉教授） 川 邊 雄 大（日本文化大学教授） 長 谷 暢（真宗大谷派沖縄別院輪番・法政大学沖縄文化研究所国内研究員） 松 金 直 美（真宗大谷派教学研究員）
一般研究（古谷伸子班） 【2023～2025年度「科研費」採択】 2023年9月1日～	研究課題	コミュニティ運動としての複合農業－持続可能な農業の追求
	研究代表者	古 谷 伸 子
	研究員	古 谷 伸 子（講師・文化人類学／専門社会調査士）
	協同研究員	田 邊 繁 治（国立民族学博物館名誉教授）

【共同研究】繰越による活動継続・補助事業期間延長

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究 (井上和久班) 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題	支援が必要な子どもと親のための光・音・匂い環境を用いた『親子の遊び空間』の開発
	研究代表者	井上 和 久
	研究員	井上 和 久 (教授・特別支援教育)
	協同研究員	大久保 圭 子 (大和大学教授)

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究 (高橋真班) 【2019～2023年度「科研費」採択】	研究課題	キンギョから見る知覚統合の進化的基盤
	研究代表者	高 橋 真 (准教授・比較認知科学)
一般研究 (井黒忍班) 【2020～2024年度「科研費」採択】	研究課題	アフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域の水利権に関する比較史研究
	研究代表者	井 黒 忍 (准教授・東洋史)
一般研究 (鄭祐宗班) 【2020～2023年度「科研費」採択】	研究課題	戦後日本の国際法学者による朝鮮問題の法理論争
	研究代表者	鄭 祐 宗 (准教授・近現代朝鮮日本の政治社会史／国際法・国際政治史／等しく生きる自由)
一般研究 (中西麻一子班) 【2020～2023年度「科研費」採択】	研究課題	南インドの仏教受容に関する図像学的研究：カナガナハハリ大塔を手掛かりに
	研究代表者	中 西 麻一子 (任期制助教・仏教学 (インド)・仏教美術史 (インド)・特別研究員)
一般研究 (阿部利洋班) 【2021～2024年度「科研費」採択】	研究課題	集合的なニーズ・権利に関わるグローバルな正義の比較社会学的研究
	研究代表者	阿 部 利 洋 (教授・社会学)
一般研究 (喜多恵美子班) 【2021～2023年度「科研費」採択】	研究課題	植民地期前後における日朝間美術交流について
	研究代表者	喜 多 恵美子 (教授・韓国朝鮮美術)
一般研究 (川端泰幸班) 【2021～2023年度「科研費」採択】	研究課題	南丹地域の歴史史料を活用した地域文化の発信と継承に関する研究
	研究代表者	川 端 泰 幸 (准教授・日本中世史)
一般研究 (平田絵未班) 【2021～2024年度「科研費」採択】	研究課題	日本人学習者のための韓国語発音教案開発－語頭平音の音響音声学的考察を中心に－
	研究代表者	平 田 絵 未 (任期制助教・韓国語韓国文学・言語学・特別研究員)
一般研究 (高橋学而班) 【2021～2023年度「科研費」採択】	研究課題	9～13世紀の北アジア諸民族国家における多民族共生社会成立の歴史考古学的総合研究
	研究代表者	高 橋 学 而 (特別研究員)
一般研究 (濱野亮介班) 【2021～2023年度「科研費」採択】	研究課題	中国近世における儒・仏・道三教の死者儀礼と明朝宗教政策との関連について
	研究代表者	濱 野 亮 介 (特別研究員)
一般研究 (寺川直樹班) 【2022～2024年度「科研費」採択】	研究課題	フランス人格主義を基点とした「人格の完成」の再検討－道德教育との関連もふまえて－
	研究代表者	寺 川 直 樹 (講師・教育学)
一般研究 (鈴木真太朗班) 【2022～2023年度「科研費」採択】 ～2023年8月31日	研究課題	「説得」をめぐるパスカルの思想と方法の総合的研究
	研究代表者	鈴 木 真太朗 (任期制助教・パスカルを中心とする17世紀フランス思想／フランス語圏文化／外国語教授法・特別研究員)

一般研究（平田公威班） 【2022～2023年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	イェルムスレウ言語論からみた20世紀後半フランス思想の研究 平田公威（任期制助教・20世紀フランス哲学／一般言語学／ジル・ドゥルーズ・特別研究員）
一般研究（古川拓磨班） 【2022～2023年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	日系オーストラリア文学の可能性を考察する－第二次世界大戦時強制収容体験を中心に 古川拓磨（任期制助教・英語文学／人種／宗教・特別研究員）
一般研究（吹田隆徳班） 【2022～2026年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	薬師と阿弥陀：インドにおける浄土教の思想的変遷を追う比較研究 吹田隆徳（任期制助教・特別研究員）
一般研究（磯部美紀班） 【2022～2023年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	個人化社会の葬儀における僧侶存在に関する宗教社会学的研究－法話に注目して－ 磯部美紀（PD研究員・社会学・特別研究員）
一般研究（上野牧生班②） 【2023～2027年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	世親『普賢行願論』ボタラ宮新出サンスクリット語写本研究 上野牧生（准教授・仏教学）
一般研究（徳田剛班） 【2023～2025年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	ポストコロナ期の日本の地方部における外国人受け入れと社会的共生に関する総合的研究 徳田剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学）
一般研究（ターンブル班） 【2023～2024年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	外国語教育における「萌芽的バイリンガリズム」：研究・認識・更新 Blake A. Turnbull（講師・英語教育／トランスランゲージング／バイリンガリズム）
一般研究（白取耕一郎班） 【2023～2025年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	「参加の格子」モデルを用いた協働の長期的発展メカニズムの解明 白取耕一郎（講師・公共政策／協働／社会保障）
一般研究（大関綾班） 【2023～2025年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	長編合巻『白縫譚』の長編構成に関する研究 大関綾（任期制助教・日本近世文学／和食文芸・特別研究員）

【個人研究】 繰越による活動継続・補助事業期間延長

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（上野牧生班①） 【2017～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	世親作『釈軌論』の総合的研究 上野牧生（准教授・仏教学）
一般研究（渡邊温子班） 【2017～2020年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	『甚深伝』校訂と解析によるミラレーバの仏教思想の解明 渡邊温子（特別研究員）
一般研究（西川幸余班） 【2018～2020年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響 西川幸余（准教授・英語教育／英米文化）
一般研究（岡部茜班） 【2018～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の実態及び有効性の検討 岡部茜（講師・社会学・社会福祉学）
一般研究（田中正隆班） 【2019～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望 田中正隆（教授・社会学）
一般研究（中野加奈子班） 【2019～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究 中野加奈子（准教授・社会福祉学）

一般研究 (スミザース班) 【2019～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English Ryan W. Smithers (准教授・外国語教育・言語学・英米文化)
一般研究 (上原尉暢班) 【2019～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	『四六文章図』研究－日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐる－ 上原尉暢 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究 (大原ゆい班) 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	新たなソーシャルサポートとしての〈よりそう支援〉のモデル化に関する研究 大原ゆい (准教授・社会学)
一般研究 (野村実班) 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	中山間地域のモビリティ確保策に関する比較研究 野村実 (講師・モビリティ/まちづくり/地域交通政策/コミュニティ)
一般研究 (陳宣聿班) 【2020～2021年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	現代宗教と胎児生命観の変容：日本と台湾の「プロライフ運動」を通して 陳宣聿 (PD 研究員・宗教学・特別研究員)
一般研究 (狭間芳樹班) 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	維新期における東本願寺の破邪論とキリシタン－樋口龍温の未公開史料の分析と公開－ 狭間芳樹 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究 (本林靖久班) 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	真宗地域における葬墓制と他界観に関する民俗学的研究 本林靖久 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究 (山本春奈班) 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	戦国期の誓約をめぐる社会史的思想史的研究 山本春奈 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究 (西村雄郎班) 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	地方社会の解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の展開と課題 西村雄郎 (特別研究員)
一般研究 (前田充洋班) 【2021～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	19世紀末～20世紀初頭ドイツ帝国海軍におけるコマンド・テクノロジーの実態の解明 前田充洋 (講師・近代ドイツ史/日独関係史/ドイツ企業史/広義の軍事史)
一般研究 (許燕華班) 【2021～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	国際移民のホームランド維持に関する研究：中国朝鮮族移民による母村への遠隔地参加 許燕華 (任期制助教・社会学/東アジア地域研究・特別研究員)

【PD 個人研究】

個人研究 (陳宣聿班)	研究課題 研究代表者	現代社会における宗教と胎児生命観の研究 陳宣聿 (PD 研究員・宗教学)
個人研究 (磯部美紀班)	研究課題 研究代表者	現代日本における葬送儀礼と僧侶に関する研究－首都圏の事例を中心に－ 磯部美紀 (PD 研究員・社会学)
個人研究 (澤崎瑞央班)	研究課題 研究代表者	中国仏教における不退転の概念内容の解明 澤崎瑞央 (PD 研究員・仏教学)
個人研究 (鶴留正智班)	研究課題 研究代表者	浄土真宗の古典に示される理念の研究 鶴留正智 (PD 研究員・真宗学)

※変更が生じた場合、大学ホームページにて、随時、更新いたします

2023(令和5)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介

個人研究

世親『普賢行願論』のポタラ宮 新出サンスクリット語写本研究

研究代表者・准教授 上野 牧生
(仏教学)

『普賢行願讃』は、「誓願の王」と呼ばれる独立した誓願文として、あるいは華嚴経・入法界品の最後部に編み込まれ、善財童子の遍歴に終わりを告げる讃頌として、仏教世界に広く深く浸透した大乘仏典である。

およそ60の韻文から構成される『普賢行願讃』は、十方三世の仏土におわす、ありとあらゆる仏への誓願に基づく普賢行と、極楽におわす無量光仏のもとでの往還回向を主題とする。すなわち、普賢行を源とする往還回向である。

この『普賢行願讃』は『大無量寿経』本願文(特に第22願)の一起源と目され、『普賢行願讃』に基づく普賢行を実践する者は「現世において阿弥陀仏に見え」「命終ののち、極楽に往生し」「阿弥陀仏より授記を受け」「衆生が極楽に往生するよう回向する」と説かれる(第49-62偈)。

そうした『普賢行願讃』に対し、インド仏教の伝統から数多くの注釈が作られたようである。インド撰述の注釈として、チベット大蔵経テンギュルには龍樹・世親・陳那・嚴賢・釈友の注釈が残されており、また現存は確認されていないものの、チベットの仏典翻訳目録や備忘録には徳光・仏称の注釈が記録されている。幸いにもそのうちのひとつ、世親(Vasubandhu, 4~5世紀)作と奥書に記される注釈のサンスクリット写本(2種)が新たに発見され、その発見に伴い敦煌蔵訳写本(2種)も見出された。

本研究はこれら未解読の新出史料を対象とし、世親に帰せられる『普賢行願讃』の注釈、すなわち『普賢行願論』のサンスクリット写本を解読する。また、現存する限りの『普賢行願讃』サンスクリット写本群、および敦煌文献に含まれるチベット訳『普賢行願讃』(注釈を含む)を調査する。総じて、浄土思想文献としての『普賢行願讃』の受容史を探る。

かかる新出史料を解読することにより、散逸したと思われた貴重文献をサンスクリット原典の形で復元し得るのみならず、アジア広域における浄土思想を解明する手がかりとなる史料を初めて学界に提供することになる。(JSPS 科研費 23K00058)

個人研究

ポストコロナ期の日本の地方部 における外国人受け入れと社会的 共生に関する総合的研究

研究代表者・准教授 徳田 剛
(地域社会学・移民政策研究)

日本に在留する外国籍者や外国ルーツの人たちの多くは三大都市圏や各地の中心都市などの都市部に多く、外国人数が少ない傾向にある地方部では「多文化共生の地域づくり」といった課題の優先順位は低かった。ところが、地方部での過疎化の進行、全国的なインバウンドブームの到来などにより、2010年代に入って地方在住外国人の数が急増しており、これまでに外国人の受け入れや共生についての取り組みが活発ではなかった多くの地域で対応に迫られることになった。新型コロナウイルスの感染拡大によって国境を越えた移動が大きく制限され、在留外国人数は一時的に減少したが最近では再増加してきており、地方部における「コロナ後」の外国人受け入れのあり方が問われている。

上述のような外国人人口の地域的な偏りは、移民やエスニシティに関する先行研究の偏りにも反映されており、地方在住外国人に関する先行研究は乏しかった。そうした中で2013年ごろから中四国・近畿地方などの中山間地域での外国人の受け入れ状況や多文化共生の取り組み事例について、現地調査を進めてきた。3期目にあたる今回の採択課題では、ポストコロナ期における外国人受け入れや地域における多文化共生に向けた課題を明らかにするが、そこでは1) コロナによる移動制限下およびそれ以降の状況把握とともに、2) 2019年の入管法改正や出入国管理局の「格上げ」(在留出入国管理庁への再編)、各地での日本語教育の環境整備や技能実習制度の改変の動きなどの政策面の動向の把握とその効果の検証が企図されている。

本研究では、3年間の研究期間を通じて、上記のような大きな政策変更や、これまで多くの来日があったベトナムでの「日本離れ」といった外国人流入の動向の変化などが地方の各現場に与えている影響について検証する。その上で、カナダや韓国などの地方部での外国人受け入れの取り組みや諸施策を参照しつつ、人口減少下の地方部における外国人受け入れのあり方について検討し、提言をしていく予定である。

個人研究**外国語教育における「萌芽的バイリンガリズム」：研究・認識・更新**

研究代表者・講師 Blake TURNBULL
(Foreign Language Education/
Applied Linguistics/Bilingualism)
ターンブル ブレイク

(外国語教育／応用言語学／バイリンガリズム)

研究テーマ

本研究は、外国語教育の文脈の中で、どのようにバイリンガリズムが生まれるのか、そしてそれをどのように利用すれば学生のバイリンガル言語能力を全体的に伸ばすことができるのかを検証する。この研究の目的には下記の三つがある。

1. 外国語学習者のバイリンガリズムについて、理論的・実証的に裏付けられた論拠を提供すること (研究)
2. 外国語学習者がどのように見られているか、その結果としてどのような教育が行われているかを明らかにし、バイリンガル教育への変化の必要性を説明すること (認識)
3. 外国語教師が、学生の総合的な言語能力を開発するために、学生の「萌芽的バイリンガリズム」を活用して、どのように教育実践を更新できるかについての情報を提供する (更新)

活動内容

この研究は、2年間かけて行われ、2023年度の第一部では、外国語学習者を「萌芽的バイリンガル」として再評価するための理論的基盤を構築する。英語学習者のバイリンガリズムに関する多面的な視点から、言語的、心理的、社会的、政治的、教育的な要素を検討し、文献を評価し、情報を統合し、理解を深める。これにより、2024年度の研究活動に強固な理論的基盤になる。したがって、研究の第二部では、2024年度に実施され、日本における英語教育にとってのバイリンガル教育戦略の効果を評価し、英語教師が授業で利用できる実用的なアイデアを提供する予定である。

共同研究**コミュニティ運動としての複合農業
ー持続可能な農業の追求**

研究代表者・講師 古谷 伸子
(文化人類学)

本研究は、20世紀末以降、東北タイを中心に広がりつつある自律的な農民ネットワークおよびその複合農業の検討を通じて、新興国農民が能動的に展開する持続的な農業モデルを明らかにすることを目的とする。

さまざまな作物の栽培や家禽の飼育、非木材林産物の利用を組み合わせるタイの複合農業については、従来、技術的な特色や政策関連の側面から注目されることはあったが、その実践の持続性・自律性をもたらす条件については十分に検討されてきていない。

そこで本研究では、「相対的に独立したメンバーが相互学習を繰り返しながら変化していく」コミュニティ運動の観点を採用することで、タイにおける複合農業の自律的な展開過程を次の3点から体系的に整理し、理論化することを試みる。①農民集団間の相互学習ネットワークの特徴、②各地域の農民集団内部における作付や流通に関するルールと協働関係の実態、③自給自足と収穫物・加工品販売への考え方および販路確保の動向。①に関して、例えばサコンナコン県を中心に広がるネットワークは、自発的な研修・合宿・コミュニティラジオの運営等を通じて、栽培方法や肥料作成の知見を共有し、それぞれに発展させている。②としては、「メンバーは20種類以上の作物を栽培する」といったミニマルなルールを条件とすることで、各農民の能動性と地域的な集合性のバランスを確保する工夫が見られる。これらは、農業技術や経済合理性というよりも社会関係や組織運営に関する要素であり、従来の研究では中心テーマとはなっていないが、複合農業実践の成否を分ける条件として重要な役割を果たしているものと考えられる。

本研究では、タイにおける複合農業実践家をはじめとする関係者への聞き取りと関連資料の整理・分析をとおして、複合農業の持続性・自律性をもたらす条件を明らかにし、他地域の事例との比較につながる視点を提示することをめざす。

個人研究

「参加の格子」モデルを用いた協働の長期的発展メカニズムの解明

研究代表者・講師 白取 耕一郎
(行政学・地方自治論)

日本において官民の協働は重要な概念として社会に定着したのみならず、国際的にも協働研究は隆盛している。しかし、大半の協働研究の時間的視野は短く、目下の取り組みの分析が主流である。また、近年、「長期的」取り組みについての業績が出てきているが、その定義は「5年以上」などと中期的なものになっている。

本研究の目的は、協働の発展プロセスを分析するために「参加のはしご」を修正した「参加の格子」モデルを提示し、岡山県奈義町を中心とする日本の協働の事例をそのモデルに基づいて実際に調査・分析して、協働が長期的に発展するメカニズムを明らかにすることである。

岡山県奈義町は、協働のまちづくりや子育て支援で知られている。同町では、2005年には1.41だった合計特殊出生率が、2012年の「子育て応援宣言」を経て、2019年に2.95となっている。町の保育施設においては、市民自身が子育て支援に参加する自主保育も行われている。奈義町の子育て支援を紹介する記事や先行研究は存在するものの、いずれも現在の子育て支援に着目しているものであり、奈義町誕生以来の協働のまちづくりの成り立ちは学術的に研究されていない。

本研究では、その関係性を理論的に示すために、「参加の格子」モデルを提示する。試作版の「参加の格子」モデルでは、2つの軸で協働の発展状況を記述する。現状では、行政から市民への権力の再分配を表す「参加」(Participation)の軸は4段階、協働の成果を表す「生産」(Production)の軸も4段階で協働的取組の状態を評価できるようになっている。

現在までの史料分析や半構造化インタビューにより、奈義町の「地域ぐるみ」の子育て支援は歴史的な成果物であり、政策も町民の生活実態に応じて修正され続けてきたことが明らかとなっている。これは短期的視野の研究では発見できない成果である。引き続き解明に取り組みたい。

個人研究

長編合巻『白縫譚』の長編構成に関する研究

研究代表者・任期制助教 大関 綾
(日本近世文学)

本研究は幕末から明治初期にかけて刊行された絵入長編小説(長編合巻)『白縫譚』(全90編、嘉永2年(1849)~明治18年(1885)刊)について考察を行うものである。本作品は合巻の中でも最長編のもので、3人の作者によって書き継がれた人気作品である。幕末期には様々な価値観・文化が変遷し、作品もその影響を受けている。本研究では長年書き継がれた長編合巻作品の趣向の変化について考察を行う。

具体的には次の3つの論点・課題について、調査を進める。(イ) キリシタンに対する当時の人々の意識変化の解明、(ロ) 主人公の変化と女主人公に対する読者の意識の解明、(ハ) 舞台となる地方・地方の地誌や歴史に対する作者の知識の解明。

まず、(イ) は本作の主人公2人(後述)がキリシタンを連想させる造形であり、江戸期から明治期まで出版された作品であることから、キリシタンについての描写の変化が生じている。この点について、他作品との比較を基に本作品の詳細な注釈を行い、どのような意識の変化が同時代に生じたのか明らかにする。

次に(ロ)について、本作は刊行当初、題名や刊行予告、序文や口絵の構図などからみて、《若菜姫》と《青柳春之助》の2人が主人公であった。しかし、最終的には《若菜姫》が主となり、《春之助》の登場は明らかに減る。この原因に本作の刊行途中で歌舞伎化した「しらぬひ譚」の影響があるのではないかと考える。そこで、「しらぬひ譚」での女主人公・若菜姫がいかに演じられたかを追究し、合巻作品との精緻な比較を行う。

三つ目の(ハ)について、本作品の舞台は九州地方であり、江戸在住の作者がどのように地方に関する知識を得ていたのか、またどのような書物(写本の軍記類も考察対象に含める)を典拠として作品の「世界」を構築したかについて、作者の交友圏の解明を行いつつ、当時の「地方観」を明らかにする。

2023(令和5)年度東京分室 PD 研究員個人研究 研究目的紹介

個人研究

浄土真宗の古典に示される 理念の研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員 鶴留 正智
(真宗学)

『教行信証』や『歎異抄』は浄土真宗の古典であり、「聖典」として尊重されている。あるテキストが聖典となるのは、そこに宗教的理念が示されていると信じられるからである。宗教者においては、聖典に示される理念を軸として、宗教的実践の方向が生みだされる。ただし、古典に示される理念は古典の解釈によって導きだされるものであるから、その解釈は宗教的であると同時に学的営為として要求される。そこで生みだされる解釈は、まずは同じ教えに生きる人を対象とするにしても、同時に同じことばを共有する現代社会に対しても提供されなくてはならない。というのは、浄土真宗の教えも、それに生きる人も、現代社会を場として生き、共に生きる他者と問題を共有するからである。

そのような視点のもとで浄土真宗の古典の一つである『歎異抄』を読むと、そこに消極的な姿勢が読みとられてきたことは問題である。『歎異抄』には、「親鸞一人」ということばに象徴される「個」の教説がある。この個の教説は、「自己への沈潜」、「内へ折れ込む」態度を示すかのようなものもある。そのように解釈するならば、あたかも浄土真宗の教えが促すものは自己へのまなざしのみであって、他者を問題にしないかのようである。

しかし、『歎異抄』というテキストは、批判的精神の発露という性格をもっている。その批判は、「おおせ」に対する責任に基づいた、「一室の行者」に対する公共的なものである。このことを前提とするならば、『歎異抄』は少なくとも念仏者の共同体に向けた普遍的なものであり、そのような普遍性を前提として「個」の教説を検討していく必要があるだろう。

したがって本研究は、『歎異抄』における個の教説が普遍的な理念として呼びかけられていることをさまざまな観点から明らかにすることを目的とする。そのことによって、他者と共に生き、諸問題と直面することの場で、浄土真宗はいかなる宗教であるのか、浄土真宗はどのようにして現代社会と関わっていくべきかを考えていく。

公開講演会・研究会開催報告(2023. 4. 1~2023. 9. 30)

チベット文献研究班公開講演会 目片祥子氏「チベット・モンゴル仏教史研究の 一側面：Nyer mkho mthong ba don yod を中心に」

チベット文献研究 研究代表者・教授 三宅 伸一郎

2023年7月24日、ハーバード大学南アジア研究部門 Associate の目片祥子氏を講師として「チベット・モンゴル仏教史研究の一側面：Nyer mkho mthong ba don yod を中心に」とのテーマで公開講演会を開催した。講師の目片氏は、2011年に本学大学院文学研究科国際文化専攻で博士号を取得した後、アメリカに渡り、2013年からはハーバード大学南アジア研究部門 Associate としてチベット語口語の指導を行うとともに、11世紀から13世紀までのいわゆる「初期サキヤ派」の歴史を研究しており、直近では以下のような論文を発表している。

“Some Remarks on the Genealogy of the Sakya (Sa skya gdung rabs) by Taksang Lotsāwa (Stag tshang lo tsā ba, 1405-77).” *History of Tibet: Essays in Honor of Leonard W. J. van der Kuijp*. Edited by Kurtis R. Schaeffer, Jue Liang, and William A. McGrath, Wisdom Publications: Somerville, 2023: 543-554.

今回の講演の内容は、格格其博士（清华大学人文与社会科学高等研究所）、孙鹏浩博士（Inner Asian and Altaic Studies, Harvard University）との共同研究の成果であった。取り上げられたのは『必備・見即獲益 (Nyer mkho mthong ba don yod)』というタイトルのチベット語文献である。積尊の伝記に始まり、仏教宇宙論、インド・チベット・モンゴル史、仏教語概説に至るまでの仏教百科的な内容を有するこの文献は、ウメー書体で書かれ、全135フォリオ（ただし、BDRCで公開されている画像データを見る限り、数フォリオ欠けがあるようである）の分量を持つ写本として伝存している。写本そのものは、チベットのいずれかの地域で撮影され、BDRC (Buddhist Digital Resource Center) にて W00KG04003 の文献番号を与えられ公開されていたものの、これまで本格的な研究がなされてこなかった。

この文献が注目される理由は、それが、モンゴル大

蔵経カンジュルの成立に大きな貢献を果たし、数多くの仏教文献を翻訳したシレート・ゲーシ (Siregetü gūūsi) により翻訳され、1587-1620の間に成立したと考えられているモンゴル語仏教文献『本義必用経 (Čiqula kereglegčī tegūs utqatu neretü šastir)』の原本であると考えられるからである。この『本義必用経』は、17世紀に成立した『黄金史 (Altan tobči)』や『蒙古源流 (Erdeni-yin Tobči)』などのモンゴル年代記に見られる「政教一致論」や「インド・チベット・モンゴル同祖論」などの概念の基礎を築いたものであり、モンゴル文献史上、極めて重要な位置を占めている。ただし、その原本となったチベット語文献については、これまで、パクバ (Phags pa Blo gros rgya mtsho, 1235-1280) が1278年に著した『彰所知論 (Shes bya rab gsal)』ではないかとの説があった。しかし詳細に検討してみると、類似部分が一部のみであり、また、『彰所知論』に見られない『宝性論』『百業経』『大般涅槃経』からの引用もなされていることから、この『本義必用経』の原本が『彰所知論』であるとの説は通説とならなかった。今回目片氏が紹介した『必備・見即獲益』は、そのタイトルと内容が一致することから、まさにこの『本義必用経』の原本にあたるものである。

今回の講演の中で、目片氏は特にこの『必備・見即獲益』の著者や著作年代について論じた。すなわちこの文献の著者は、

'di ni chos tshul chos khrim s ldan pa yi //

blo can bzang po'i dpal gyis legs par bkod //

との奥書の詩句にその名が組み込まれている（写本ではその名前の部分に赤字で「nges bzung nyi zla」という記号が付けられている）ツルティム・サンボ (Tshul khrim bzang po) という人物であり、本文中で自身を「チョーゴワ (chos sgo ba)」との称号を付けて名乗っていると指摘する。そして、この人物がカギュー派の仏教史書『ホロン仏教史 (lHo rong chos

’byung)』に闡化王タクバ・ギェルツェン (Grags pa rgyal mtshan, 1374-1432) の二人の弟の教師を務めたことが記されていることから、彼が14世紀後半にパクモドゥ派の本山デンサティル (gDan sa thil) で教師の役割を果たしていた人物ではないかと述べた。そして、本文中に「近頃 (deng sang)」すなわち著作年代を、仏滅後3504年経過した「鉄の女・豚の年 (lcags mo phag)」であるとしていることを指摘し、西暦に換算すれば紀元前2134年を仏滅年とするサキヤ派系の説に基づけば、その年代は1371年になるとした。また、本文献の後世への影響について、19世紀に活躍したアムド地方レプコン (Reb gong) 出身のニンマ派の行者シャプカルワ (Zhabs dkar Tshogs drug rang grol, 1781-1851) の著作に本文献が引用されていることを指摘した。

学期末の多忙な時期であるにもかかわらず、学内外から数多くのチベット学・モンゴル学の研究者が出席し、講演後には活発な議論も行われた。

真宗総合研究所・中国蔵学研究中心 国際共同研究会 「蔵文文献と梵文写本」

チベット文献研究 研究員・准教授 上野 牧生
チベット文献研究 研究代表者・教授 三宅 伸一郎

2023年9月13日、大谷大学真宗総合研究所と中国蔵学研究中心（China Tibetology Research Center, CTCRC）との間に、学術交流協定が再び締結された。この再締結を記念して「蔵文文献と梵文写本」と題する国際共同研究会が同日、大谷大学にて開催された。その詳細を報告するに先立ち、ここで CTCRC について概要を述べておきたい。

北京市に位置する CTCRC は中華人民共和国の国立研究機関であり、チベット学に広く関連する数多くの研究者を擁する。CTCRC、なかでもその「宗教部門」の特徴は開かれた国際性にあり、本学の他、ウィーン大学（オーストリア）、ハンブルク大学・ライプツィヒ大学（ドイツ）、龍谷大学・創価大学・東京外国語大学など世界各国の大学・研究機関と学術協定を締結している。中国国内に留まらず、国際的な枠組みのもとでチベット学が推進されている。

特に仏教学分野では、サンスクリット語仏教写本の原典研究によりその名を世界に轟かせている。インド・チベット仏教学分野において、CTCRC が刊行する叢書 *Sanskrit Texts from Tibetan Autonomous Region* (STTAR) を知らない者はいないであろう。同シリーズから仏教学研究の支柱となる原典研究が続々と公開されているように、重要な史料を秘匿して死蔵してしまうのではなく、むしろ積極的に海外の研究者と共同研究を行うことで原典研究の迅速な公開を目指す姿勢こそ、CTCRC の特色である。

この度来日した CTCRC のメンバーから STTAR の新刊が本学に寄贈された。その一部を紹介する。

STTAR no. 24

Buddhist Hymns: A New Collection. Zhen Liu and Johannes Schneider (Eds.), 2022.

STTAR no. 23

Dharmakīrti's Sambandhaparīkṣā and Devendrabuddhi's Sambandhaparīkṣāvṛtti. Ernst Steinkellner (Ed.), 2022.

STTAR no. 22

Candrakīrti's Madhyamakāvatārabhāṣya: Chapters 1 to 5.

Horst Lasic, Xuezhong Li, Anne McDonald, and Helmut Krasser (Eds.), 2022.

STTAR no. 21

Dharmottara's Pramāṇaviniścayaṭīkā Chapter 3. Pascale Hugon, Takashi Iwata, and Toshikazu Watanabe (Eds.), 2020.

上掲書はいずれも国際研究の枠組みにおいて実施された共同研究の成果であり、学界が永きにわたり待望してきた原典でもある。なかには、その存在が学界に全く知られていなかったものも含まれる。

さらに、CTCRC は四年毎に *Beijing International Seminar on Tibetan Studies* (北京国際蔵学会研讨会) を開催している (最近開催は2023年8月)。この巨大会の *Proceedings* にも堅実な原典研究が収録されており、現時点で3冊が刊行されている。最近刊は以下。

Sanskrit manuscripts in China III: Proceedings of a panel at the 2016 Beijing Seminar on Tibetan Studies, August 1 to 4. Birgit Kellner, Xuezhong Li, Jowita Kramer (Eds.), 2020.

仏教学の研究史を振り返れば、新写本の発見は斯学を大きく進展させてきた。ギルギット写本やガンダラ語仏教写本の発見はその好例であろう。現在のアビダルマ研究は P. Pradhan による初のサンスクリット校訂本 (1967) なくして実現していない。そうした原典研究は長い研究期間を要するものの、その輝きは容易には色褪せない。新奇な考察論文は一時的に耳目を集めるに過ぎず、十年後には誰も読まない。一方、STTAR の原典研究は百年後の仏教学徒にも参照されるであろう。今回来日した CTCRC のメンバーと意見交換する中で、研究者のみならずその事務スタッフまでがこうした視点を共有し、予算配分や組織再編を行なっていることを知り、驚愕したことを付記しておく。

CTCRC と大谷大学の縁は、本学大学院博士後期課程

において博士(文学)の学位を取得した李学竹博士がCTRCに在籍したことに始まる。この度の学術交流協定の再締結に際しても李博士が中心的役割を果たしてくれた。

「蔵文文献と梵文写本」と題する国際共同研究会では以下4名による研究発表が行われた。その概要とともに紹介する。

1. 李学竹 (Li Xuezhu) 「关于中国藏学研究中心梵文研究的情况」

李氏による発表は、CTRCを中心に解説が進められている梵文写本研究プロジェクトに関するものであった。1. 現在ほぼ翻刻が完了している写本、2. 今後本格的に解説が進められる写本、3. プロジェクトが進行中の写本として、以下が紹介された。

1. ほぼ完了したプロジェクト

- 1.1 Madhyamakāvātāra chapters. 7-11.
- 1.2 Abhidharmasamuccaya (16 枚ほど写本が欠落。ただし Abhidharmasamuccayavyākhyā から回収可能)

2. これから進行するプロジェクト

- 2.1 Gāthādvayavyākhyāna
- 2.2 Madhyamakayogācārabalābalarīkṣā

3. 継続中のプロジェクト

- 3.1 Catuḥstotravivarāṇa (Lumucuo 博士による研究)
- 3.2 Abhidharmadīpa
- 3.3 Śāṅkarānanda の Prajñālamkāra 注 (kārikā 220 偈は Rāhula collection に含まれる)
- 3.4 Ratnākaraśānti の Abhisamayālamkāravṛtti

2. 上野牧生 「『普賢行願讚』の注釈について－梵文写本・敦煌写本・四種の蔵訳－」

筆者(上野)による発表は、李博士と共同で解説を進めている世親(Vasubandhu)作『普賢行願讚注』の梵文写本について、テングル所収4種の蔵訳および敦煌蔵訳写本との比較のもとで紹介し、その特徴を概観したものである。興味深いことに、この注釈文献にはインド仏教における二種回向論が確認される。

3. 索南多杰 (bsod nams rdo rje) 「中国藏学研究中心“蔵文文献資源数据中心”建設情况」

ソナム・ドルジェ氏の発表は、CTRCによって進められている「蔵文文献資源数据中心(チベット文献資源データ・センター)」というプロジェクトについての紹介であった。このプロジェクトでは「中華大典・蔵文卷」をはじめとする、既出版の洋装本のチベット

語文献をはじめ、ナルタン版テングルなど貝葉形式の文献の画像データ、およびそのテキストデータをWebページ上で閲覧できるよう提供するという。テキストデータは検索が可能になるとのことである。チベット語の文献データベースとしてはE. Gene Smith創設のBuddhist Digital Resource Centerによるものがあるが、現在出版されている洋装本のチベット語文献、特に中国で刊行されているものについては版權の問題などでデータの公開が進んでいない。そのため本プロジェクトは、そうした状況を切り開くものとして期待される。

4. 三宅伸一郎 「チベット語文『目連救母経』について」

三宅氏の発表(チベット語)は、大谷大学博物館に蔵外no.12767として所蔵される『聖大集目連菩薩救母経(Phags pa 'dus pa chen po byang chub sems dpa' mo'u 'gal gyi bus ma la phan btags pa'i mdo)』(写本・127葉)に関するものである。本経は、目連が地獄に墮ちた母を救う、いわゆる「目連救母説話」を内容とする。「経」と題され、翻訳者の名前も奥書に記載されているため、サンスクリットからの翻訳仏典という装いを持つが、様々な点から「擬経」と推測される。「目連救母説話」は中国で成立したものであり、その意味で本経は中国仏教とチベット仏教の交流を考える上で重要な資料であると論じられた。

以上、国際共同研究会「蔵文文献と梵文写本」では文献研究とその方法、および公開について研究成果が共有された。一見地味なこうした文献研究は多大な研究期間を要するものの、それがもたらす成果は着実なものとなる。

なお、以上の国際共同研究会に先立ち、CTRCより大谷大学名誉教授のカンガル・ツルティム・ケサン(白館戒雲)氏に、海外招聘研究員証書が授与された。証書授与ののち、白館名誉教授はCTRCとの長きにわたる協力関係を振り返り、再び自分を招聘研究員として採用してくれたCTRCに感謝の意を表した。そして「招聘研究員の職務を真摯に遂行し、この榮譽を大切に、チベット学の研究と日中間の学術交流のために努力を惜しまない」と決意を述べられた。

歎異抄ワークショップ開催報告(2023. 4. 1~2023. 9. 30)

第11回 『歎異抄』 翻訳研究ワークショップ参加

国際仏教研究(英米班) 研究員・准教授 Michael J. Conway
大谷大学大学院修士課程第一学年(真宗学専攻) 長野 摂受
大谷大学大学院修士課程第一学年(真宗学専攻) 手島 英翔

2023年6月9日から11日にかけて龍谷大学の大宮校舎において『歎異抄』翻訳ワークショップが開催され、以下の研究員および本学の学生(以下、敬称略)が参加した。

井上 尚実(教授・研究代表者)

木越 康(教授・研究員)

Michael J. Conway(准教授・研究員)

アマ ミチヒロ(准教授・研究員)

WOO JONGIN(博士後期課程第3学年・研究補助員)

但馬 普(博士後期課程第1学年・研究補助員)

長野 摂受(修士課程第1学年)

手島 英翔(修士課程第1学年)

竹原 仰(修士課程第2学年)

今回のワークショップは、第11回目となり、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所と龍谷大学世界仏教文化研究センターと本研究所の間で結んだ三者学術交流協定に基づいて、2017年度から取り組んでいるプロジェクトの一環として、龍谷大学の主催で行われた。『歎異抄』の英訳と詳細な注釈を作成するために、江戸期に作られた『歎異抄』の注釈書を英訳している。

前例に則って、翻訳作業は三つの部会で行われた。報告者は、深励師の『歎異抄講林記』の作業部会を担当し、龍谷大学の嵩満也が寿国師の『歎異抄可笑記』の作業部会を担当し、カリフォルニア大学バークレー校のマーク・ブラムが円智師の『歎異抄私記』の部会を担当した。

『歎異抄私記』の作業部会では、6月10日の夕方に第13条に対する注釈の翻訳を完成させた上で、11日には、未完となっていた第1条に対する円智の注釈の翻訳を終わらせた。『歎異抄可笑記』の部会では、第13条に対する注釈の翻訳を9日の内に完成させて、10日と11日は第14条に対する注釈の翻訳に取り組んだ。『歎異抄講林記』の部会では、第13条の注釈部分の後半と第14条に対する注釈の一部を検討し、確定した。

本プロジェクトは、各機関の大学院生の育成を重要な目的の一つとして位置付けている。今回、初めてワークショップに参加した修士課程在学中の学生二人が、参加の報告と所感を書いたので、以下にそれを記載する。

長野摂受の報告は次の通りである。

今回、私は龍谷大学大宮キャンパスにて3日間にあたって開催された『歎異抄』ワークショップに参加した。『歎異抄』の内容すらままならない私にとって、その解釈書の英訳作業というものは到底手に負えない代物であろうことは初めから承知していたが、事実その通りであることを痛感する三日間となった。

当日は『歎異抄』を解釈している三人の祖師——深励、寿国、円智——の3つの班に分かれ、その解釈を英訳していく運びとなっていた。私は主に深励の班にお邪魔をし、話し合いながらの英訳作業に参加させてもらった。参加と言っても、それほど英語力があるわけでもなく、ただただその場に座っていたという表現が適切かもしれない。しかし、英語を交えての班での話し合いは想像以上に新鮮で楽しい時間となり、私は今までの拙い英語学習の経験から、なんとか英単語を考えだそうとしていった。そうして、翻訳作業の要となる考え方は実際に文章を英語に置き換えていくという作業の中で身についていったように思う。

私が受け止めた英語翻訳の要とは次の二点に分けられる。1つには、日本語の文章を正しく理解すること。2つには、理解した文章を適切な英単語やフレーズに置き換えていくことである。特にこの2つ目の考え方には班の話し合いでも当然大きく時間を割くこととなったが、私が意外に厄介だと感じたのは1つ目の考え方である。実際、『歎異抄』というテキストは古文であるから、まず現代の日本語で正確に意味を捉える必要がある。しかも、その当時の歴史的状況も踏まえて、である。これがなかなか大変な作業であったように記憶している。助詞の使い方ひとつをとっても、意味がぶれてしまうので慎重にならざるをえない

のである。『歎異抄』に特有の思想や言葉の使い方は現代の私たちにとって容易には理解しがたい。そのことを改めて実感する機会となった。

また、言語の持つ思想的な背景について、よく考えて英訳していく必要性にも触れることができた。いわゆる言語的ニュアンスというものは単語やフレーズ、またはその音の響きの持つ感覚である。その言語の思想的な背景を加味して置き換えていくのは難しい作業である。少しでも原典のニュアンスをその作業の中で再現しようとするならば、やはり言語的な知識とセンスを磨き、原典への理解を深めなければならぬと強く感じた。このワークショップはこれからの經典に対する研究や語学を身に着けることへの意欲をより高められる3日間となった。この貴重な経験を糧に今後も經典をもっと深く読んでいきたいと思う。

手島英翔の報告は以下の通りである。

6月10日から三日間、龍谷大学で『歎異抄』のワークショップが開かれた。私が参加できたのはうち二日であったが、いずれも貴重な経験だったと振り返って思う。

本ワークショップでは大谷大学大学院から博士、修士課程の学生数名に加え、特別研究員、ゼミや授業でお世話になっている先生方も参加されていた。私はワークショップがどのような雰囲気の中で行われるのか疑問であったが、全体を通して笑いのある空間であり、楽しく過ごすことができた。

翻訳は三班に分かれて行われた。私はコンウェイ先生のもとで香月院深励『歎異抄講林記』の翻訳作業に参加させてもらった。しかし参加といっても受動的な態度が主で、積極的に議論に参加できる機会はほとんどなかった。というのも真宗学を学び始めからまだ日が浅かった私は江戸期の講録はもとより、『歎異抄』についてもまったくの不案内であったからだ。それでも一つの語彙を、どのような方法によって、どのテキストを根拠に、確定させていくのかというプロセスを間近で経験できたことは、本ワークショップにおける大きな収穫であったと感じている。

また、翻訳作業の合間の小休止や昼休憩などで、龍谷大学の学生や先輩方と交流できたこともよい経験であった。彼らが何を関心事として、何を読んでいるのか、あるいはどのように学んでいるのかについて知る機会は、自らの学びに対する姿勢を見つめなおす良い機会になった。

来年度には同じワークショップがアメリカのバークレーで開催されると聞いている。参加の如何を問わず、今回痛感した自らの足りない部分をこれからの学びの中で意識していかなければならないと感じてい

る。

以上のように、今回のワークショップも参加した学生に刺激を与え、新たな学びの方向性を示している。次のワークショップは2024年3月22日から24日までカリフォルニア大学バークレー校の主催で開催される予定である。



6月11日午後の『歎異抄私記』部会



全体会の様子

海外研究調査報告 (2023. 4. 1～2023. 9. 30)

大谷大学真宗総合研究所東アジア・北アジア仏教 研究班とモンゴル国立大学総合科学部との共同調査： モンゴル国ドルノド県のヘルレン・バルス・ホト城址

東アジア・北アジア仏教研究 研究代表者・教授 松川 節
東アジア・北アジア仏教研究 研究員・准教授 井黒 忍

大谷大学真宗総合研究所東アジア・北アジア仏教研究班とモンゴル国立大学総合科学部との共同研究プロジェクトの2023年度現地調査は、モンゴル国ドルノド県ツァガンオボー郡に位置するヘルレン・バルス・ホト都城址（八角仏塔を含む）を対象とした。大谷大学側は松川節研究員（社会学部教授）と井黒忍研究員（文学部准教授）、モンゴル側はU. エルデネバト・モンゴル国立大学総合科学部社会科学系人類考古学科長（教授）が参加し、2023年9月4日～11日の日程で実施した。

9月4日(月)、松川と井黒は17:00にウランバートル新空港着、19:00に市内ホテルに投宿。同ホテルに滞在していた白石典之・新潟大学教授、三宅俊彦・淑徳大学教授と夕食を共にしつつ情報交換を行った。両氏はモンゴル考古学が専門で、今年度の発掘調査を終えたところだった。

9月5日(火)11:00、モンゴル国立大学を訪問し、D. ザヤーバートル・総合科学部長と面会した。P. デルゲルジャルガル同学部人文科学系歴史学科教授、U. エルデネバト教授が同席した。面会において、①共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13世紀～17世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的的研究」第2期（2016～2018年）研究成果報告書が真宗総合研究所より出版されたことを報告して謹呈し、②第3期（2019～2022年）の報告書については2023年度中にモンゴル国立大学側から出版することを確認しあった。そして、③今後、「モンゴル仏教の起源に関する仏教学・歴史学・考古学的研究」をテーマにして共同研究を推進していくことで意見が一致し、来年度に向けて協定と覚書更新のための合意を取り付けていくこととなった。続いてN. アルタントゥグス・総合科学部人文系部長と会見し、P. デルゲルジャルガル教授も合流して昼食を摂りつつ懇談し、以上でモンゴル国立大学への公式訪問は終了した。同日夕刻、モ

ンゴル国で調査中の船田善之・広島大学教授の科研費調査隊一行7名と邂逅し、情報交換をする機会を得た。

9月6日(水)11:30、ガンダン寺学術文化研究所を訪問し、N. アムガラン同研究所研究員兼事務局長、B. ムンフバートル図書館長兼外事室長と会見し、今後、共同研究「ガンダン寺所蔵文献と本学図書館所蔵文献の比較研究」を推進していく点で合意に達した。14:00、モンゴル科学アカデミー考古研究所を訪問し、13世紀の仏教寺院址である釈迦院（モンゴル国フブスグル県アルボラグ郡）の出土遺物を実見した。L. エルデネボルド・モンゴル科学技術大学教授、B. ツォクトバートル・モンゴル科学アカデミー考古研究所研究員、A. オチル・モンゴル科学アカデミー歴史・民族研究所研究員、白石教授、三宅教授が同席した。18:00、松川と井黒はモンゴル国立大学のD. ザヤーバートル学部長主宰の夕食会に招待された。モンゴル側はザヤーバートル学部長、U. エルデネバト・人類考古学科長、P. デルゲルジャルガル教授が列席した。

9月7日(木)、早朝より地方調査に赴く予定であったがモンゴル側日程調整の不調により出発は一日延期され、市内にて博物館・史跡見学を行った。井黒は2022年10月にオープンしたチンギスハーン国立博物館を見学し、松川はモンゴル国立大学で開催されたKh. ニャムボー選集出版記念会に参加した。

9月8日(金)08:15、松川と井黒はU. エルデネバト、運転手E. トゥムルローと共にジープ一台でウランバートルを出発し、11:30、バガノールを通過、13:40、ヘンティ県ジャルガルトハーン郡のドライブインにて昼食、15:45、チンギスホトの食品市場にて食肉を購入、19:00、ドルノド県ホロンボイル郡にて日没となったため、郡中心のロッジに一泊することとした。結果として好判断だった。その晩は雷雨とな

り、テント泊していたら一晩中風雨におののいていただろう。本日の走行距離は544キロであった。

9月9日(土)07:20、ホロンボイル郡を出発、すぐにヘルレン河を南から北へ橋で渡り、ヘルレン・バルス・ホト遺跡へと走行する。08:20、ヘルレン・バルス・ホト第I遺跡着。本遺跡は2014年4月に大谷大学真宗総合研究所(松川、武田)とモンゴル国立大学総合科学部(U.エルデネバト)との共同プロジェクトで調査済であるが、今回再調査に赴いたのは次の理由による。①ヘルレン・バルス・ホト第I遺跡は城壁周辺から出土した屋根瓦の形状から契丹時代に築城されたとみなされているが、城外東方250mに建つ七層の磚積八角塔は、契丹の仏塔の多くが磚積八角であるという点は類似しているが、この塔は内部が空洞であり磚積の合間に木材が組み込まれる点で、契丹の仏塔には見られない形式になっていること。また2014年のモンゴル科学アカデミー考古研究所と奈良大学による共同調査において、この七層八角塔内の建築部材の表皮をサンプルとして放射性炭素年代測定を行ったところ、16~17世紀前半の値が出たこと、以上より七層八角塔の築城年代は未確定である。②城内の建造物址と仏塔址について、2021年にモンゴル国立大学と昭和女子大学の共同調査隊が放射性炭素年代測定を行った結果、16世紀の年代を得ていた。この年代は、ここから南西方向に200キロ離れたスフバートル県トゥブシンシレー郡の「スミーン・ドブジョー」遺跡群(放射性炭素年代測定によって16~17世紀成立の仏教寺院跡と見られている)と並行しており、ヘルレン・バルス・ホトI城内の仏教的建造物の年代については、16~17世紀前半を想定する必要がある。これは上述①の七層八角塔の16~17世紀前半の値とも連関する。③さらに2021年のモンゴル国立大学と昭和女子大学の調査隊は、ヘルレン・バルス・ホトI城壁付近で年代測定を行ったところ、14世紀半ばの年代を得た。元朝末期の順帝トゴンテムル・ハーンの時代である。

このように、ヘルレン・バルス・ホト第I遺跡は10~12世紀の契丹時代に築城され、14世紀の元朝末期にも使われ、さらに16~17世紀前半に仏教寺院が新たに建立されるという3つの文化層を持つ可能性が指摘されているわけで、これをうけて今回は、1) 城外東方に建つ七層八角塔と城内建造物址・仏塔址の再考察、2) ドローンを使用した城壁全体の計測、3) 北城壁の不規則性の考察を行った。

11:15、ヘルレン・バルス・ホト第II遺跡に移動した。一辺300メートルの城壁を伴う匈奴時代の都城址である。11:33、ヘルレン・バルス・ホト第III遺跡に

移動。同じく一辺300メートルの方形都城址であるが、1960年代の発掘調査によりここから「内府」という漢字が書かれた陶器片が出土しており、元朝末期の順帝トゴンテムル・ハーン時代の築城と見なされている。ドローンを使用した城壁全体の計測を行った。

12:50、出発。ヘルレン河沿いを南西に進み、14:35、ヘンティ県バヤン・オボー郡のハンザト・ホト遺跡着。モンゴル日本共同「新世紀」プロジェクトによって2017~19年に発掘された、13世紀後半の元朝時代に築城された大規模な都城址である。ここでも地表観察と、ドローンを使用した城壁全体の計測を行った。15:30、出発。19:00、チンギスホト着、「ハン・ガルディ」というホテルに投宿した。このホテルは本年5月~7月にモンゴルを舞台とした日本のテレビドラマ・ロケ隊の定宿として長期間利用されていたとのこと。本日の走行距離は356キロであった。

9月10日(日)09:00、チンギスホト発、12:40、バガノールのドライブインにて昼食、16:30、ウランバートル市に帰還・投宿した。本日の走行距離は346キロであった。夕刻、別業務で同ホテルに滞在していた村岡倫・龍谷大学教授と夕食を兼ねて情報交換した。

9月11日(月)、全ての業務を完了して井黒は13:00ウランバートル新空港発の便で帰国の途に就き、松川は引き続き現地で別業務に従事し、9月18日(月)に帰国した。



9月9日 ヘルレン・バルス・ホトIの仏塔におけるドローン計測(上下とも)



国内研究調査報告（2023. 4. 1～2023. 9. 30）

未公開の西方寺所蔵清沢満之自筆文献

清沢満之研究 研究代表者・准教授 西本 祐攝

本研究では、2021年度～2023年度の期間、清沢満之自坊の西方寺所蔵文献の調査を行っている。この研究は、本研究が、1998年度より大谷大学編『清沢満之全集』（全9巻、岩波書店、2002-3年、以下『全集』と略）の刊行に向けて、蔵書整理、調査、撮影等を行ってきた写真データにもとづく研究である。本研究では、西方寺所蔵清沢満之自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）の影印（36枚撮りフィルム248本分、総コマ数8500枚超）を所蔵しているが、『全集』及び、『全集』別巻（全2巻、岩波書店、2020-1）その他で公開済の文献はその3分の1程である。これは主に『全集』が清沢満之自身の著述を収録し、清沢満之の受講ノートや書籍からの抜書、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。

未公開文献には、清沢満之の育英教校、帝国大学、真宗大学寮の頃から後年に至るまでの文献が含まれている。これらの未公開文献について研究を進めることは、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものであり、本研究ではその継続的な研究を行ってきた。昨年度末までに本研究が所蔵している全写真データについての確認を終えたが、その中で、写真撮影の際にもれが生じたもの、写真が不鮮明なもの、文献の「のど」の部分に文字が隠れているもの等を確認するに至った。それらについての調査、撮影のために、清沢満之自筆原稿を所蔵する西方寺への出張を行った。

2023年8月22日に、西本祐攝研究代表、西尾浩二研究員（庶務）、藤井了興囑託研究員、山雄優生研究補助員の4名で出張調査を行った。

午前中は、西方寺の門前にある碧南市藤井達吉現代美術館（以下、美術館と略）で開催中の「碧南市制75周年記念事業 開館15周年記念 生誕160年 清沢満之の世界展」を拝観した。この展観は、碧南市、碧南市教育委員会、美術館が主催、朝日新聞社が共催するもので、大谷大学も協力をしている。この展観に向けて、一昨年度に美術館と西方寺から清沢満之研究の研究代表である西本に協力依頼があり、本学博物館に取り次いだ経緯から、美術館と本学博物館の事前の打ち合わせに西本が同席し、大谷大学から出展する清

沢満之関係の展示物についての助言という協力をさせていただいていた。

今回の出張で美術館を訪れることを先方には伝えていなかったが、西方寺から美術館に連絡をしていただいていたおり、また、上記の経緯から当日は、美術館の豆田誠路学芸員、日置麻里学芸員がお待ちいただいていた。両氏からは協力への謝意を伝えられた。展示は、充実した内容であり、2時間余り拝観したが、時間が足りないと感じるほどであった。今回の調査にあわせて拝観することができ、充実した時間を過ごすことができた。

午後からは、西方寺での調査、撮影を行った。13時に西方寺に到着、本堂でお参りをした後、西方寺住職、坊守様の協力を得て、清沢満之記念館（西方寺境内内）2階をお借りし、所蔵文献の調査、撮影を行った。実際に撮影した文献は、17点である。

現在、本研究では西方寺所蔵文献について、その1頁ごとに記載されている内容を精査したリスト等を作成している。今回の出張では、その研究方針と進捗状況を報告し、さらには作成リストについて、清沢満之記念館の展観等で活用いただけるよう、研究を進めていることを西方寺と情報共有することができた。完成したリストについては、本年度末をめどに、西方寺と共有する予定である。



西方寺門前にて

今回の出張では、当初予定していた美術館の拝観、ならびに西方寺での調査とその目的をほぼ実施することができただけでなく、美術館の学芸員の方とお会いし、関係を構築する機会ともなった。今回、調査、撮影させていただいた文献を踏まえて、本研究の研究目的を遂行していきたい。

真宗総合研究所彙報 2023. 4. 1 ~ 2023. 9. 30

■研究所関係

◎会議

◇2023年8月7日(月)15:00~16:00
(響流館4階会議室)

1. 博物館資料閲覧等に関する打ち合わせ

◎研究所委員会

◇2023年4月26日(水)12:20~12:50
(博綜館5階第5会議室)

1. 特別研究員の解任について
2. 指定研究 研究組織の変更について
3. 一般研究の発足について
4. 一般研究(予備研究)について
5. その他

◇2023年5月10日(水)12:20~12:50
(博綜館5階第2会議室)

1. 学術交流協定の締結について(Dharmachai Tipitaka Project(タイ))
2. その他

◇2023年7月12日(水)16:30~18:00
(博綜館5階第2会議室)

1. 2023年度研究組織(一般研究の発足)について
2. 客員研究員の受け入れについて
3. 学術交流協定の締結について
4. その他

◇2023年8月30日(水)15:00~16:00
(博綜館5階第5会議室)

1. 一般研究(予備研究)の募集について
2. 『真宗総合研究所研究紀要』査読・校閲の依頼について
3. 客員研究員の受け入れについて(報告)
4. 学術交流協定(中国蔵学研究中心)について(報告)
5. その他

◎真宗総合研究所2022年度成果報告会

◇2023年6月14日(水)16:30~19:00
(響流館3階メディアホール)

■特定研究 樹立の精神100年

【研究会】

日時: 4月12日(水)16:30~18:00
出席者: 一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰
英貴志

場所: 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内容: 研究計画・研究体制に関する打ち合わせ

日時: 4月19日(水)18:30~19:30
出席者: 一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰
英貴志

場所: 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内容: 研究資料に関する確認と補助業務に関する打ち合わせ

日時: 4月26日(水)18:00~19:00
出席者: 一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰
英貴志

場所: 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内容: 補助業務に関する体制と具体的作業の確認

日時: 5月10日(水)18:00~19:00
出席者: 一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場所: 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内容: 研究補助者との顔合わせと作業内容の確認・打ち合わせ

日時: 5月22日(月)18:00~19:00
出席者: 一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場所: 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内容: 研究体制の見直しと作業進捗状況の確認等

日時: 6月7日(水)18:00~19:00
出席者: 一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場所: 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内容: 研究作業の進捗状況の確認と今後の方針に関する打ち合わせ

日時: 6月23日(金)18:00~18:30
出席者: 一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場所: 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内容: 研究作業の進捗状況の確認など

日時: 7月4日(火)18:00~19:00

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：研究作業の進捗状況の確認と今後の方針に
 関する打ち合わせ

日 時：7月11日(火)18:00～19:30
 出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：7月27日(木)10:40～12:00
 出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：8月1日(火)16:00～17:30
 出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：9月6日(木)10:30～12:00
 出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：9月26日(火)16:30～18:00
 出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰
 場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
 内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

東方仏教徒協会

■EBS 公開セミナー

日 時：2023年4月24日(月)14:40～16:10
 場 所：響流館4階会議室
 講 師：Michael J. Conway

日 時：2023年5月22日(月)14:40～16:10
 場 所：響流館4階会議室
 講 師：Michael J. Conway

日 時：2023年6月26日(月)14:40～16:10
 場 所：響流館4階会議室
 講 師：Michael J. Conway

日 時：2023年7月24日(月)14:40～16:10
 場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
 講 師：Michael J. Conway

日 時：2023年9月25日(月)14:40～16:10
 場 所：響流館4階会議室
 講 師：Michael J. Conway

■EBS 公開講演会

◇The Cult of Tokugawa Ieyasu as Avatar of the Buddha of Medicine

日 時：2023年4月14日(金)9:00～
 場 所：響流館3階マルチメディア演習室
 講演者：Timon Screech

出席者：Robert F. Rohdes、John LoBreglio、
 井上尚実、Michael J. Conway、新田智通、
 山内美智、岡田治之、筑田一毅、
 藤枝直子、岩崎千裕 ほか

◇The Search for the Real : Buddhism and Neuroscience

日 時：2023年5月26日(金)18:00～
 場 所：響流館3階マルチメディア演習室
 講演者：Bernard Faure

出席者：Robert F. Rohdes、John LoBreglio、
 井上尚実、Michael J. Conway、新田智通、
 山内美智、岡田治之、筑田一毅、
 藤枝直子、岩崎千裕 ほか

■EBS 編集委員会

日 時：4月26日(木)16:30～
 場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
 出席者：Robert F. Rohdes、John LoBreglio、
 井上尚実、Michael J. Conway、新田智通、
 山内美智、岡田治之、筑田一毅、
 藤枝直子、岩崎千裕

日 時：7月26日(木)16:30～
 場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
 出席者：Robert F. Rohdes、John LoBreglio、
 井上尚実、Michael J. Conway、新田智通、
 Ama Michihiro、筑田一毅、加藤淳、
 藤枝直子、岩崎千裕

■EBS 編集会議

日 時：2023年5月24日(木)16:20～
 場 所：EBS 事務局
 出席者：Robert F. Rohdes、John LoBreglio、
 井上尚実、Michael J. Conway、藤枝直子

日 時：2023年6月27日(火)17:00～

場 所：EBS 事務局

出席者：Robert F. Rohdes、John LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、新田智通、
藤枝直子

日 時：2023年9月26日(火)17:00～

場 所：EBS 事務局

出席者：Robert F. Rohdes、John LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、新田智通、
Ama Michihiro、藤枝直子

■東方仏教徒協会（EBS）運営委員会

日 時：2023年7月3日(月)10:00～10:30

場 所：博綜館5階第5会議室

出席者：一楽真、平野寿則、柘植至、廣川智貴、
藤元雅文、山内美智、井上尚実、
Ama Michihiro、Michael J. Conway、
Robert F. Rhodes、筑田一毅、加藤淳、
藤枝直子、岩崎千裕

■国際仏教研究

【会議】

◇国際仏教研究班 全体ミーティング

日 時：2023年4月20日(木)12:20～12:50

場 所：真宗総合研究所内 ミーティングルーム

参加者：井上尚実、Michael J. Conway、木越康、
Dash Shobha Rani、Ama Michihiro、
新田智通、Woo Jongin、但馬普

◇国際シンポジウム準備会議

日 時：第1回

2023年4月14日(金)16:20～17:50

第2回

2023年6月6日(火)16:20～17:50

第3回

2023年7月25日(火)16:20～17:50

場 所：真宗総合研究所内 ミーティングルーム

参加者：井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、Woo Jongin、但馬普

■東アジア・北アジア仏教研究

【国内出張】

◇日 時：2023年6月2日

出張先：真宗大谷派了善寺（埼玉県東松山市）

出張者：松川節

要 務：(故)小澤重男東京外国語大学名誉教授所
蔵東アジア・北アジア関係蔵書の予備調査

◇日 時：2023年6月17日～18日

出張先：真宗大谷派了善寺（埼玉県東松山市）

出張者：松川節・井黒忍

要 務：真宗総合研究所への(故)小澤重男東京外
国語大学名誉教授所蔵東アジア・北アジア
関係蔵書の寄贈のため、了善寺において書
籍の選別・箱詰め・発送作業を行なった。

【海外出張】

◇日 時：2023年9月4日～11日

出張先：モンゴル国ウランバートル市、ドルノド県
ツァガンオボー郡

出張者：松川節・井黒忍

要 務：モンゴル国立大学との共同研究テーマ「モ
ンゴル仏教の起源に関する仏教学・歴史
学・考古学的研究」に関わる調査の実施。

【ミーティング】

◇日 時：2023年4月12日

場 所：ミーティングルーム

出席者：松川節、井黒忍、松浦典弘、箕浦暁雄、
三鬼丈知

内 容：今年度研究計画についての打ち合わせ

【研究調査】

◇日 時：2023年9月26日

場 所：大谷大学図書館

参加者：松川節、春花

要 務：大谷大学図書館所蔵モンゴル語仏教文献の
調査と書誌情報記録。

■清沢満之研究

【ミーティング】

◇第1回

日 時：2023年7月4日(火)14:40～16:10

出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：今年度の活動について

リスト作成と出張内容について

◇第2回

日 時：2023年7月18日(火)14:40～16:10

出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：出張に関する日程と内容の検討

◇第3回

日 時：2023年7月27日(木)14:40~16:10
 出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生
 会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
 目 的：出張に使用する機材等の検討

◇第4回

日 時：2023年8月21日(月)15:00~16:30
 出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
 会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
 目 的：出張の内容確認と使用する機材の受け取り

◇第5回

日 時：2023年9月6日(水)10:00~11:30
 出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
 会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
 目 的：出張活動の報告及び各作業の検討
 写真データの確認

◇第6回

日 時：2023年9月20日(水)14:00~15:30
 出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
 会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
 目 的：研究班の活動報告及び各作業報告

【出張】

◇第1回

日 時：2023年8月22日(火)7:30~21:30
 出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生、藤井了興
 出張先：真宗大谷派西方寺（愛知県碧南市）
 碧南市藤井達吉現代美術館（愛知県碧南市）
 目 的：清沢満之展拝観
 資料調査及び撮影
 活動内容の報告

■チベット文献研究

【国際共同研究会】

◇真宗総合研究所・中国蔵学研究中心国際共同研究会
「蔵文文献と梵文写本」

日 時：2023年9月13日(水)13:30~15:10
 場 所：響流館3階マルチメディア演習室
 発表者および発表題目：
 1. 李学竹「關於中国蔵学研究中心梵文研究的情况」
 2. 上野牧生「『普賢行願讚』の注釈について－梵文写本・敦煌写本・四種の蔵訳－」
 3. 索南多杰 (bsod nams rdo rje)「中国蔵学研究

中心“蔵文文献資源データセンター”建設情况」

4. 三宅伸一郎「チベット語文『目連救母経』について」

■仏教写本研究

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究
プロジェクト公開研究発表会】

◇第15回

日 時：2023年6月16日
 発表者：Annette Schmedchen, Dániel Balogh
 (Humboldt University, Berlin)
 会 場：オンライン
 発表題目：Digital Epigraphy in the Project DHARMA

◇第16回

日 時：2023年6月23日
 発表者：Dr. Anirban Dash
 (Director, National Mission for Manuscripts, New Delhi)
 会 場：オンライン
 発表題目：National Mission for Manuscripts: Present, Past and Future

◇第17回

日 時：2023年7月14日
 発表者：Dr. Rafal Felbur
 (Heidelberg University)
 会 場：オンライン
 発表題目：A New Online Tool for the Production of Critical Scholarly Editions

【嘱託研究員招聘・共同研究】

日 時：2023年5月18日(水)~2023年5月28日(月)
 (内個人研究5日間含む)
 出張者：Dr Suchada Srisetthaworakul (Mahidol University, 本班嘱託研究員)
 場 所：真宗総合研究所、大谷大学博物館
 要 務：「大谷貝葉」の確認作業・データ整理

【ミーティング・情報交換】

◇第1回

日 時：2023年4月23日 18:00~19:00
 出席者：Dash Shobha Rani (大谷大学)
 Dr Suchada Srisetthaworakul
 (Mahidol University, 本班嘱託研究員)
 場 所：オンライン
 内 容：DTP 研究所との協定について

◇第2回

日 時：2023年5月16日16:00～17:00

出席者：Dash Shobha Rani（大谷大学）

Dr Suchada Srisetthaworakul

（Mahidol University, 本班嘱託研究員）

場 所：オンライン

内 容：招聘期間中の作業内容について

内 容：今年度の指定研究、分室の研究環境の整備に関する話し合い

◇第5回

日 時：2023年7月3日(月)13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

内 容：今年度の指定研究に関する調査内容の打ち合わせ、連絡事項

■宗教・社会研究

【研究会】

◇「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究」研究会

日 時：2023年9月12日(火)10:00～12:00

場 所：真宗総合研究所事務室ミーティングルーム

講演者：後藤晴子（大谷大学）・演題「沖縄における伝統的な習俗や宗教的世界観」

出席者：福島栄寿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智
（台湾でオンライン参加：陳宣聿）

◇第6回

日 時：2023年7月24日(月)13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

内 容：今年度の指定研究に関する調査内容、研究会企画の打ち合わせ

〈ミーティング〉

◇第1回

日 時：2023年4月17日(月)13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

内 容：今年度の指定研究に関する問い合わせ

◇第7回

日 時：2023年8月21日(月)13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：福島栄寿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

内 容：今年度の指定研究に関する調査内容、冬開催のシンポジウムに関する打ち合わせ

◇第2回

日 時：2023年5月8日(月)13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

内 容：今年度の指定研究の打ち合わせとPD研究員2名による研究報告

◇第8回

日 時：2023年9月11日(月)16:30～17:00

場 所：真宗総合研究所事務室ミーティングルーム、オンライン

出席者：福島栄寿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智
（台湾でオンライン参加：陳宣聿）

内 容：今年度の指定研究に関する調査内容の打ち合わせ

◇第3回

日 時：2023年5月22日(月)13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

内 容：今年度の指定研究の打ち合わせとPD研究員2名による研究報告

◇第9回

日 時：2023年9月12日(火)14:30～17:00

場 所：真宗総合研究所事務室ミーティングルーム、オンライン

出席者：藤元雅文（主事）、福島栄寿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智
（台湾でオンライン参加：陳宣聿）

内 容：今年度の指定研究に関する調査内容の打ち合わせの後、藤元主事とPD研究員との懇談

◇第4回

日 時：2023年6月12日(月)13:00～17:00

場 所：真宗総合研究所東京分室

出席者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

◇第10回

日 時：2023年9月25日(月)13:00~17:00
場 所：真宗総合研究所東京分室
出席者：福島栄寿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、陳宣聿
内 容：今年度の指定研究に関する調査内容、春開催の研究会、来年度の研究会開催に関する打ち合わせ

参加者：陳宣聿

◇東アジア恠異学会第144回定例研究会

日 時：2023年9月30日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：陳宣聿

個人研究班 陳班

【学会発表・研究会参加】

◇東アジア恠異学会第142回定例研究会

日 時：2023年5月21日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：陳宣聿

◇國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所研究会
(2023年度第2回)

日 時：2023年7月3日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：陳宣聿

◇南山宗教文化研究所主催 ローチ基金研究員講演会

日 時：2023年7月6日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：陳宣聿

◇南山宗教文化研究所主催セミナー

日 時：2023年7月10日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：陳宣聿

◇東アジア恠異学会第143回定例研究会

日 時：2023年7月29日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：陳宣聿

◇國家科學及技術委員會人文社會科學研究中心：學人開講

日 時：2023年8月1日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加

【出張】

◇2023年6月13日~2023年6月14日

出張先：東北大学、川内南キャンパス
要 務：第116回宗教学研究会で研究発表
出張者：陳宣聿

◇2023年6月15日

出張先：龍谷大学、大宮キャンパス
要 務：実践真宗学の教員と研究会の打ち合わせ
出張者：陳宣聿

個人研究 磯部班

【学会発表・研究会参加】

◇東洋英和女学院大学死生学研究所第2回公開講座

日 時：2023年5月27日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇国立歴史民俗博物館基幹研究第1回研究会

日 時：2023年6月3日~4日
場 所：国立歴史民俗博物館
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇大谷大学哲学会合評会

日 時：2023年6月7日
場 所：オンライン
要 務：合評会参加
参加者：磯部美紀

◇「人口減少社会における仏教寺院の実態研究－多宗派のブロック調査」研究成果報告会

日 時：2023年6月18日
場 所：オンライン
要 務：報告会参加、研究発表
出席者：磯部美紀

◇「宗教と社会」学会第31回学術大会

日 時：2023年6月24日～25日
場 所：愛知学院大学名城公園キャンパス
要 務：学会参加
参加者：磯部美紀

◇大谷大学真宗総合研究所一般研究木越班公開研究会

日 時：2023年6月28日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所第1回研究会

日 時：2023年6月28日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所第2回研究会

日 時：2023年7月3日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇南山宗教文化研究所主催 ローチ基金研究員講演会

日 時：2023年7月6日
場 所：オンライン
要 務：講演会参加
参加者：磯部美紀

◇視聴覚伝道研究会第10回布教研究大会

日 時：2023年8月26日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇日本宗教学会第82回学術大会

日 時：2023年9月9日～10日
場 所：東京外国語大学府中キャンパス
要 務：学会参加、研究発表
出席者：磯部美紀

【出張】

◇2023年6月29日
出張先：パシフィコ横浜

要 務：フューネラルビジネスフェア2023の参加
出張者：磯部美紀

◇2023年7月20日～21日

出張先：大谷大学
要 務：専門的知識の提供、資料収集
出張者：磯部美紀

◇2023年8月29日

出張先：東京ビックサイト
要 務：第8回エンディング産業展の参加
出張者：磯部美紀

個人研究 澤崎班

【学会発表・研究会参加】

◇東アジア仏教研究会2023年度第1回大会

日 時：5月13日(土)
場 所：オンライン
要 務：大会参加
出席者：澤崎瑞央

◇部派仏教研究会

日 時：6月10日(日)
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：澤崎瑞央

◇日本印度学仏教学会第74回学術大会

日 時：9月2日(土)～3日(日)
場 所：オンライン
要 務：研究発表
参加者：澤崎瑞央

【出張】

◇2023年4月13日(木)～14日(金)
出張先：しんらん交流館、大谷大学
要 務：専門的知識の共有、資料収集
出張者：澤崎瑞央

◇2023年7月17日(月)～8月1日(火)

出張先：大谷大学
要 務：資料収集、安居傍聴
出席者：澤崎瑞央

◇2023年9月4日(月)～15日(金)

出張先：大谷大学
要 務：下田正弘先生の仏教学特別セミナー参加
出席者：澤崎瑞央

個人研究 鶴留班

【学会発表・研究会参加】

◇第11回『歎異抄』ワークショップ

日時：6月9日～11日

場所：龍谷大学大宮キャンパス

要務：ワークショップ参加

出席者：鶴留正智

◇真宗連合学会第69回学術大会

日時：2023年6月17日

場所：京都女子大学

要務：学会参加

出席者：鶴留正智

◇日本印度学仏教学会第74回学術大会

日時：9月2日～3日

場所：オンライン

要務：学会参加

参加者：鶴留正智

◇日本宗教学会第82回学術大会

日時：2023年9月9日～10日

場所：東京外国語大学府中キャンパス

要務：学会参加、研究発表

出席者：鶴留正智

【出張】

◇2023年6月12日、16日

出張先：大谷大学

要務：専門的知識の共有、資料収集

出張者：鶴留正智

■組織

□研究所委員会

廣川 智貴（研究・国際交流担当副学長、真宗総合
研究所長）

藤元 雅文（真宗総合研究所主事）

采翠 晃（大学院人文学研究科長）

山内 美智（教育研究支援部事務部長）

筑田 一毅（教育研究支援課長）

井上 尚実（教授）

Dash Shobha Rani（教授）

福島 栄寿（教授）

古川 哲史（教授）

三宅伸一郎（教授）

村山 保史（教授）

西本 祐攝（准教授）

本明 義樹（講師）

■人事

真宗総合研究所長

（新）廣川 智貴（旧）江森 英世

（2023年4月1日付）

□東京分室 PD 研究

新規採用（2023年4月1日付）

鶴留 正智

解任（2023年3月31日付）

萩 翔一

□特別研究員

新規採用（2023年4月1日付）

大関 綾

現職：任期制助教

研究期間：2023年4月1日～2026年3月31日

研究課題：長編合巻『白縫譚』の長編構成に関する
研究

『研究所報』「研究交流」に関するお知らせ

真宗総合研究所では2022年度研究所報 No.80より、研究成果の発表、研究に関する交流の場として「研究交流」を設けておりました。

No.80より紙面でも原稿の募集についてご案内しておりましたが、今号をもちまして募集を終了することとなりました。

『真宗総合研究所研究紀要』には「論文」「研究ノート」「資料」に加え、より多くの真宗総合研究所所属研究者に研究成果の発表の場を提供することを目的に2022年度から「特別・嘱託・協同研究員の研究」を設けております。

「研究交流」への投稿をご予定されていた方はこちらへのご投稿を是非ご検討ください。

「特別・嘱託・協同研究員の研究」は真宗総合研究所の研究班に「特別研究員」「嘱託研究員」「協同研究員」の身分で所属される方のみ投稿可能です。

次年度以降、投稿をご希望の場合、下記までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

なお、2023年度発行『真宗総合研究所研究紀要』（第41号）分については既に募集を締め切っておりますので、ご了承くださいますようお願いいたします。

お問い合わせ先

真宗総合研究所 事務局

E-mail: kenkyusyo@sec.otani.ac.jp



〈真宗総合研究所ホームページ〉

研 究 所 報 第 83 号

2024 年 3 月 1 日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp